

地域交流センター通信 27

March 2016, Volume 27

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

地域交流にかかわる実践と思想を深め、
新たな一歩を踏み出す



都留文科大 地域交流センター通信 第27号 目次

巻頭文：「地域づくりの基礎に学習を」

吉川 徹 4

発達援助部門

■地域教育相談室■

第1回公開講座「教育に活かすアドラー心理学」

居場所をさがす子どもたち

公開講座に参加して

上田ゆきみ 6

第2回公開講座「構成的グループエンカウンター」

尾形はつき 7

ふれあいから生まれるもの

品田笑子 8

■地域特別支援教育■

公開講演会「知的障がい教育におけるコミュニケーション指導―マカトン法を通して―」

堤 英俊 10

地域の発達障がいの子どもの自立を支援する ―「キャリアデザインワーク」開発の試み―

堤 英俊 11

「クロスボーダープロジェクト」の船出

堤 英俊 12

■地域美術教育■

地域美術教育分野から地域に発信する表現活動 ―新たな時代のものづくりに向けて―

布山浩司 14

■地域情報教育■

美術と情報が連携した図工教育におけるICTを活用した新しい教育支援プログラム

杉本光司 16

―『たからばこ作戦』の実践を通して―

暮らしと仕事部門

水と生きる、水が育てる、都留の自然と人の暮らし

内山美恵子 18

東桂地区に湧水が多い理由

福島万紀 19

湧水を利用する暮らしのこれからを探る

フィールド・ミュージアム部門

■生きものに親しむキャンプパスづくり■

自然とかわる楽しみ

加藤咲季 20

気持ちのゆとりをくれるビオトープ作業

武田美月 20

「ムササビに一番近い大学」から、新たな一歩を

加藤明香 21

「つるりん」で学ぶ生きもののたちの世界

別宮有紀子 22

キャンプパスにリスを呼ぶ会

鳥原正敏 24

■研究・教育活動■

都留文科大附属小の環境教育

小口尚良 25

■展示活動■

資料紹介展示 『昭和史かるた』 ～神田甲陽 私が体験してきた昭和の時代～

都留市立図書館 26

現在までの「わたしとあなたの都留アルバム」事業を振り返って

森屋雅幸 27

地域博物館の実現をめざして

■地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する■

オープン・アーカイブ事業の一年

■地域を調べ、記録し、学び合う■

地域の良さをもっと知りたい

『フィールド・ノート』から生まれる出会い

伊藤瑠依

北垣憲仁

南條 新

長尾 泉

地域交流研究センターの教養科目

「地域交流研究Ⅰ」——地域交流から得た知見を普遍化するためにはどうすればよいか？——

「地域交流研究Ⅱ」——生きものの地図をつくる——

「地域交流研究Ⅲ」——地域交流研究Ⅱの授業を受けての感想——

「地域交流研究Ⅳ」——山梨を知り、歩き、そのなかから自分の課題を見つける——

——地域を観察し、記録し、学び合う——

——記事を書くことで素敵な世界を知る——

——都留をもっと好きになりそう——

山口博史

西 教生

小俣深和

山口博史

北垣憲仁

福元明梨

窪田りさ

地域交流研究教育プロジェクト

■「田んぼクラブ」——稲作体験実習の取り組み——■

田んぼクラブの活動を振り返って

■都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした水環境の経年変化の把握■

湧水の様子を連続的に観る

■食育つる推進プラン——市民会議と大学の連携による学生主体の食育実践活動の試み——■

学生と共に推進する食育教室

西本勝美

岡本周治

内山美恵子

平和香子・柳 映志・御園生ゆかり

トピックス

学級づくりの向上をめざす実践講座を振り返って

文大名画座『ツナグ』と辻村深月先生とのトーク

平成27年度子ども公開講座

鶴田清司

古川裕佳

内山美恵子

地域交流研究センターサテライトから

——都留文科大学と地域をつなぐために——

——地域に広がれ！笑顔の輪——

——洋裁ワークショップを開いて——

佐藤理恵

小島花野

武田美月

第11回地域交流研究フォーラムの開催

地域交流研究活動——SAT活動をふり返って——

鳥原正敏

地域づくりの基礎に学習を

吉川 徹

私の住む地域（佐久市望月）ではコメづくりの委託が進んでいます。勤めの関係でこの地を離れた人や高齢化して農作業が出来なくなった人たちが、近くで元気にコメを作っている人に田植えから稲刈り、脱穀まですべてを任せて、1反歩10俵取れば委託された耕作者は1俵を委託した地主に渡す、という形です。最近では、委託される耕作者がトラクターなど大型機械をもつて、10軒も20軒もの家から委託を受けています。ところが、私の住む集落で何軒もの委託を受けていた耕作者が、一昨年暮れ受託を断って歩いたのです。「米価は下がる一方で、1俵（60kg）1万円前後では大規模化しても儲からない」というのです。委託をしていた人は困って、他の集落の耕作者に頼りしました。

望月はかつて人口1万人の町でしたが、10年余り前に市町村合併で人口10万の佐久市になりました。合併は地域にさまざまな影響をもたらしましたが、望月の人口は合併後10年で11.7%減少しました。そして世帯数も減少し、空き家が増え、耕作できない田畑が増えてきました。委託したい人は増え、耕作する人は減ってくる、山間地の田から次第に耕作できない田が出てくるでしょう。畑の耕作放棄地はすでに多くありますが、田は用水の管理がありますから、田の耕作放棄が増えることは、地域に重大な影響を及ぼします。国土保全の意味からも大変なことです。

そしてTPPの影響。長野県農協グループは、県下の農業に対する影響として、リンゴ42.5%、肉牛62.8%、豚肉76.7%生産額が減少すると試算しています。コメは自由競争にせず、輸入量を増やすだけといわれていますが、農業生産全体の影響を受けることになるでしょう。日本創成会議の増田レポートでは、消滅可能性が高い地域は523自治体（全体の29.1%）に及ぶと言います。地方中核都市やコンパクトシティが提唱されていますが、今必要なことはまず食糧の自給率向上、農産物の価

格保証などによる日本農業の保護と発展ではないでしょうか。これは農村地帯だけでなく、全国民の課題であり、これを抜きにして地域づくりを語ることはできないと思います。

私たちは、かつて学習会で、「抵抗から抵抗の中の創造へ」というテーマを議論したことがあります。政府の方針はおかしい、自治体の対応にも不満がある、それに対しては明確に発言し行動していく必要がある、だが、抵抗しているだけでは自分たちの暮らしは守れない、抵抗の中で自分たちの新しい暮らしを生み出していく、それが本当のレジスタンスではないか、という考えです。

私たちは70年代から80年代、さまざまな住民運動を経験しました。産業廃棄物処分場を田畑より上の山中に作るという計画、これは上流の水が汚され、農産物への悪影響がある、小学校4つを1つにするという統合計画、これは決して教師や子どもにとつてプラスにはならない、文化の灯としての学校が地域から失われてよいのか、学校給食を自校方式からセンター方式に変えるという計画、これはできるだけ地元食の食材で給食をつくるという食育としての意味が損なわれるのではないかなど、反対運動で産廃処分場は撤回となり、小学校も4校存置と決まり（近年になって統合）、給食でも一定の成果がありました。場外馬券売り場建設計画も広範な住民の活動で阻止しました。しかし、これで今までの地域の良さを守ることはできても、暮らしがよくなるわけではない、暮らしをよくしていく道を、自分たち自身で「創造」していかなければならない、ということに気がつくきました。

地元で作る疎植一本植えの低農薬米に惚れ込んで、地元の造り酒屋が「信濃のかたりべ」という清酒を作りました。高原野菜地帯で無農薬無化学肥料の有機野菜を作る人が出てきました。職人館という蕎麦屋を始めた人、平飼いで養鶏をやる人、山で養蜂に取り組む人、昔からの菓子職人、彼らが集まって「か

たりべの会」が生まれました。職人館ではこれらの酒や食材を使って料理を作り、蜂蜜を使ってハニーどら焼きが生まれました。異業種の支え合いです。そこへ新規就農で無農薬農産物を作る青年たちが加わり、製品を売る喫茶店や多津衛民芸館も参加、かたりべの会は20年が経ち、支え合いの輪は広がっています。

NPO法人未来工房もちづきでは、地元出身で近代書道の父といわれた比田井天来を顕彰し、生家の裏山に天来自然公園を作って管理し、市主催で全国臨書展が開かれるまでになり、また地元の民話を題材にした合唱組曲も歌い続けています。「おんなしろうの会」では70人ほどの会員を擁して味噌づくり、漬物づくり、郷土食の研究、会員研修などに取り組んでいます。「えいっこの会」では、荒れた田畑に蕎麦を蒔き、年4回そば祭りを開いています。これらの会の基本は主権者としての学習と実践の積み重ねです。学習でみんなが共通の認識を獲得し、より深い連帯が生まれるのだということを確認しています。地域づくりは、今そこに住む人々の幸せを作り出すこと、だから地域づくりは、平和と民主主義と人権の憲法を地域で生かす努力の中にあるのだと考えています。

人口減少、高齢化、町村合併によるへき地化、そして憲法の精神が踏みにじられ、軍靴の足音が忍び寄る時代を迎えて、私たちはますますその本質に迫る学習を重ね、「抵抗の中の創造」で足場を固めていかねばと思っています。

(よしかわ とおる・多津衛民芸館長・
NPO法人未来工房もちづき理事長)



天来自然公園に毎年望月小3年生全員が書を学びに訪れる。2015年5月



かたりべ新酒発表会でシンポジウム(元滋賀大学学長宮本憲一、職人館北沢正和、米作農家伊藤盛久、造り酒屋杜氏大澤実の各氏、コーディネーター吉川徹)。2015年4月

都留文科大学地域交流研究センター・地域教育相談室・COC推進機構共催

第1回公開講座 「教育に活かすアドラー心理学」

■品田笑子

平成27年5月29日（金）に、文科大学教育学部教授の会沢信彦先生を講師にお招きして第1回公開講座を開催しました。最近ではマンガなどでも紹介されアドラー心理学に注目が集まっています。アドラーの考え方を紹介した岸見一郎・古賀史健著『嫌われる勇気』（ダイヤモンド社）が平成26年の年間ベストセラー第10位（日販調べ）だったことから分かるように関心の高いテーマでした。当日は、一般87名、学生71名、計158名が参加、会沢先生の軽妙な語り口に引き込まれたひとときでした。そのなかから2名の方に感想を書いていただきました。

（しなだ えみこ・本学COC推進機構特任教授）

居場所をさがす子どもたち

■上田ゆきみ

自分が自分らしく生活できる場所、素直に自分を表現できる場所、そして、めざしたい自分に近づくために挑戦できる場所。自分の居場所は、誰もが求めるものです。自分探しの途中にいる子どもたちにとっては、その居場所が苦戦を強いられる場所であってはならないことを強く感じました。

会沢信彦先生の公開講座「教育に活かすアドラー心理学」に参加する機会を得ました。子どもたちの「行動」や「感情」には、そうしなければならぬ「目的」があり、その「目的」を推し量ることです。子どもの「心」が見えてくるのだそうです。そう視点を変わると、子どもたちとの向き合い方がはつきりとしてきます。

人は人との関わりのなかで成長をしています。そこには、「秩序」がなければなりません。そして、そこには、それを包み込み受け入れる「あたたかさ」が必要なのです。

私は数年前、子どもたちとの向き合い方に悩んだ時、「その子どもたちとは、今、巡り会うべくして巡り会っている」との言葉をいただいたことがあります。今もその言葉は、私が子どもたちと向き合う上での原点となっています。「できることからやり直していけばいいし、生き直していけばいい」、「子どもたちは生き直し、それを学んでいくことができる」ともアドバイスをしました。「できないこと」「いけないこと」に目を

向けるのではなく、「できたことを認める」こと。そして、「あたり前」を増やしていくこと。周りのみんなとその「成長」を感じること。数年前に出会った言葉が鮮やかによみがえってきました。私たち大人がすべきことは、その子どもたちの成長の筋道を子どもたちの側に立って考え、悩み、行動し、常に真摯に子どもたちと向き合っていくことなのだと感じました。そのこと抜きに、子どもたちの心に触れることはできないのではないかと…。

今回、この講座に参加し、その思いをもう一度抱きました。今後すべきことを再確認する機会となりました。このような機会を設けてくださったことに感謝します。ありがとうございました。

（うえた ゆきみ・都留市内小学校教諭）



公開講座に参加して

■尾形はづき

教育にとって子どもの心理を分析することはとても大切なことです。子どもが不適切な行動をとる要因は、アドラーに師事をしていたドライカースによると「注目・関心をひくため、権力闘争のため、復讐のため、そして無気力・無能力のため」の4つがあるそうです。これらの行動の対象は親や先生、友だちです。しかし子どもたちがそのような行動をとってしまった時に頭ごなしに叱るのではなく、不適切な行動に過度に注目せずに普段の適切な行動を辛抱強く勇気づける必要があります。

一方で、精神的負担により、1年以内に依願退職した新人教員が10年間で8.7倍に増えたそうです。この一因には前述のような問題に対してベテラン教員から新人教員へ効果的な指導技術が受け継がれていないため、問題に対応しきれない新人教員が追い込まれてしまうことがあります。教育を学んでいる身として、このような厳しい現状も頭に入れておく必要があると思いました。短い時間のなかで理論だけでなく先生自らの経験則に基づいたお話はとても参考になりました。

(おがた はづき・比較文化学科2年)



第2回公開講座 「構成的グループ・エンカウンター」

ふれあいから生まれるもの

■品田笑子

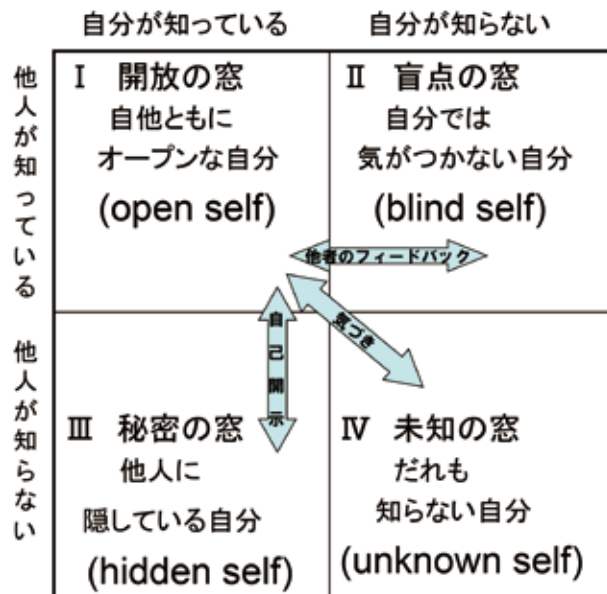
毎年度、地域教育相談室では2月の第一土曜日を目安に構成的グループ・エンカウンターをテーマとした半日の公開講座を開催しています。

グループ・エンカウンター（エンカウンターグループともいう）は「集中的グループ体験」のことで二種類あります。一つ目はカー・ロジャーズを創始者とするベーシック・エンカウンター、二つ目はカリフォルニア州ビッグ・サーのエスリン研究所が生んだ二大スター、ゲシュタルト療法のフリッツ・パールズやオープン（折衷的）・エンカウンターのウィリアム・シュッツを源流とするものです。前者はテーマやリーダーなしでフリー・トーク形式で進められ、後者はエクササイズを活用するものです。後者は國分康孝によって日本の風土に合うようにアレンジされ、1970年代後半から構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter: 略称SGE）と命名され、大学生の人間関係プログラムとして提唱・実践されてきました。その後、対象は社会人や小中高の各学校に在

籍する子どもたちに広がり、本講座で紹介しているのもこちらです。

講座ではエクササイズを活用し、その体験を媒介として参加者と交流していきます。下図は、1995年夏にアメリカの心理学者ジョセフ・ルフト（Joseph Luft）とハリー・インガム（Harry Ingham）が発表したもので二人の名前を合わせて「ジョハリの窓（Johari window）」と呼ばれているモデルです。参加者はエクササイズ体験を通して自分の本音に気づきそれを相手に開示（自己開示）し、相手はその様子を見聞きします。これによって「開放の窓」が広がり「秘密の窓」が狭くなります。これを受けた相手が自分の感じたその人のことをフィードバックすることで「盲点の窓」が狭くなり「開放の窓」がさらに広がります。本音と本音の交流を「ふれあい」と言い、これを繰り返すなかで新たな自分への気づきが生まれ「未知の窓」が狭まって「開放の窓」が広がっていきます。「開放の窓」の領域が自己理解となります。自己理解の程度にしか他者理解ができないと言われていま

ジョハリの窓（Joseph Luft & Harry Ingham, 1955）



すのでこの広さは対人関係にも影響していくことになります。

本講座の参加者は教師や学生が中心ですが年齢や立場の違う方々の集まりです。報告者がリーダー役を務め、本学保健センターの箭本佳己カウンセラーにサブリリーダーとしてサポートしてもらいながらプログラムを進めていきます。私たちの役割は安心して自己開示できるようにメンバーやルール、かわり方、時間などの設定、プログラム提供、つまり構成を通して交流を促進することです。できるだけ知らない相手とペアやグループを組んでもらいます。講座の開始直後は堅かった雰囲気やプログラムの進行に従っている人とかかわるうちに、笑いが出たり交流に夢中になったりする様子が見られ、集団としての一体感が感じられるようになっていきます。私自身も参加者としての体験が多くありますが、メンバーが旧知の仲のように思われ、その集団に安心して参加でき、かわることに喜びを感じます。参加者の感想を読むと同様な思いを持っているようです。

宿泊を伴う大人の自己啓発を目的としたエンカウンターは、終了後に解散する一時的集団で行なわれることが多く、自己洞察のためのハードなエクササイズが提供されることもあります。しかし本講座は半日と短く、参加者の多くは学級集団などの継続的集団に活用することを目的としています。従って下の表のように楽しく参加でき良好な人間関係づく

りに活用できる短時間のエクササイズに限定しています。この講座の参加者にその後について聞く機会はなかなかありませんが、学校を訪問しての研修会では「学級でやってみたい」という声が聞かれ、実際に実施した時の様子や感想を知らせていただくことがあります。自分が体験してその効果を実感することが活用につながるのだと思います。SNSが普及している今こそ、エンカウンターのように直接対面して生身の人とふれあう機会が必要なのではないかと感じています。

(しなだ えみこ・本学COC推進機構特任教授)

〈参考文献〉

國分康孝・國分久子総編集『構成的グループエンカウンター事典』二〇〇四 図書文化

平成28年2月の公開講座で実施した主な内容

	主な内容
オリエンテーション	構成的グループエンカウンターの概要 ルールの説明と契約
エクササイズ	①ペンネームづくり ②ひたすらジャンケン・あいこジャンケン ③自己紹介握手 ④2人組インタビュー・他者紹介 ⑤足し算トーク ⑥お絵かきしりとり ⑦☆いくつ ⑧二者択一 ⑨無人島サバイバルキャンプ ⑩別れの花束
終了のオリエンテーション	ペンネーム解除 現実復帰について



講座の様子



エクササイズを体験する参加者

知的障がいの子どもの「声」をはぐくむ

公開講演会 「知的障がい教育における コミュニケーション指導」

—マカトン法を通して—

■堤 英俊

地域交流研究センター地域特別支援教育分野と都留臨床教育学会との共催での公開講演会を7月25日（土）の午後に1号館215教室において開催しました。今回は、旭出学園教育研究所主任研究員・日本マカトン協会代表の松田祥子先生を講師にお迎えし、知的障がいの子どもの「声」をはぐくむことの意義とマカトン法（補助代替コミュニケーション法）について講演いただきました。マカトン法とは、発語や表出に課題のある子どもたちのためにイギリスで開発された口語とハンドサイン（手話）と描画シンボルを用いるコミュニケーション指導法で、世界40ヶ国以上で使用されています。知的障がいのある子どもたちの教育場面だけでなく、一般の小中学校や福祉・看護の現場でも広く用いられ、最近では、乳幼児用のベビーサインとしても活用されています。

当日は、60名ほどの参加があり、大盛況でした。地域の方々だけでなく、多数の現職教員や学生が参加してくれました。講演にはサイン実技も含まれており、貴重な学びの機会になりました。アンケートには、「とても勉強になりました。ジェスチャーを入れて言葉を使用することで、イメージと言葉が結び付きより子どもが理解を深めることができると思

いました」や「実践などを踏まえており、特別支援学校の現場だけでなく、ほかの場でも工夫次第で活用できるのではと感じた」といった感想があり、開催した甲斐がありました。

地域特別支援教育分野では、毎年7月下旬に今回開催したような「障がい理解研修」を企画していく予定にしています。今回のアンケートでいただいたご意見やご要望を次回の企画に活かしていきたいと思っています。また、本号の12ページに記載しましたが、地域特別支援教育分野の「クロスボーダープロジェクト（月1回の知的・発達障がいの小中高生たちを対象にしたスポーツ・アート活動）」では、今回の企画でとりあげたマカトン法をはじめ、補助代替コミュニケーション法を積極的に使用しています。補助代替コミュニケーション法を実地で学びたい方には、この活動にボランティアとして参加いただくことをおすすめします。学生、市民を問いません。関心のある方は、地域交流研究センター事務局にお問い合わせください。

（つつみ ひでとし・本学初等教育学科教員）



マカトン法のサイン（手話）の実技場面

地域の発達障がいの子どもの自立を支援する ―「キャリアデザインワーク」開発の試み―

■堤 英俊

山梨県立こころの発達総合支援センター・就労支援ワーク実行委員会の関係者から打診を受け、地域特別支援教育分野を中心に、郡内地域の発達障がいの中高生を対象にした都留版「就労支援ワーク」を開発していくことになりました。

ク」として、また、単に個人の発達保障だけでなく、都留市のインクルーシブな地域づくりとも連動させていく方向で開発していくことになりました。今年度は、4名の中高生を対象に、2日間の試行ワークを開催しました。

＜1日目（11月14日土曜日の午後）＞

そもそも、「就労支援ワーク」とは、平成19年に国中地域で立ち上げられたもので、夏休み期間に模擬的な就労体験を通して労働の意義や仕組みについて学び、自分の適性について考え、将来イメージを形成するといったことを目的とするプログラムです。

導入学習として、「お金を使う人（消費者）」としての自分をふりかえる」というワークを行ないました。「保護者から15万円をもらったら何につかうか」を考え、模造紙にまとめました。

＜2日目（12月19日土曜日の午前）＞

これまでの「就労支援ワーク」をそのまま導入するのではなく、都留文科大学に合う形にリボンすることを念頭におき、準備委員会を結成しました。委員会は、本学非常勤講師の原まゆみ先生をはじめ、「障がい者就業・生活支援センターありす」と「おもちゃ図書館はばたき」の担当者、地域特別支援教育分野担当教員の堤、「障がい者のキャリア支援」に関して研究している学生たちなどで月1回開催しました。話を進めるなかで、都留文科大学では「キャリアデザインワー

グループに分かれ、ちよつとしたインターン（職場見学・体験）に行きました。中学生は「都留市曾雌にんにく生産組合」へ、高校生は「佐野印刷」と「ナカムラ薬局」に行きました。

＜2日目（12月19日土曜日の午後）＞

それぞれのグループでのインターン体験を報告し共有したあと、あらためて、導入学習で行なったワークを行な

いました。ただし、前回とは設定が異なり、今度は「1人で生活することを考えて15万円を何に使うか」について考え、模造紙にまとめました。最後のまとめでは、「お金をつかうこと」と「お金をかせぐこと」の循環についての気づきを促し、それを踏まえて「今の自分の生活のなかでなにを意識してやっているのか」ということを言葉にしました。

来年度からは、もう少しインターンの時間を長めに設定し、夏ごろに開催しよう検討しています。今回、都留市内の「都留市曾雌にんにく生産組合」様、「佐野印刷」様、「ナカムラ薬局」様にご協力いただきました。多くの地域の方々に関わっていただくとともに、少しでも発達障がいの就労問題についての理解が郡内地域ですすんでいけばと思います。

（つつみ ひでとし・本学初等教育学科教員）



「クロスボーダープロジェクト」の船出

■堤 英俊

クロスボーダープロジェクト（通称、クロボ）とは、今年度の4月にスタートした、都留文科大学での地域の知的・発達障がいのある子どもたち対象の余暇活動とその保護者たちの「おしゃべりの場」づくりの試みです。大学の学期中（4月～7月、10月～1月）毎月1回土曜日に大学の施設を使って行なっています。今年度は、4月25日、5月23日、6月27日、7月25日、11月14日、12月19日、1月30日の計7回（10月の回は欠席者が多く中止）開催しました。「健常者と障がい者の境界（ボーダー）を超える」という意味で名称を「クロスボーダー」とし、かつそのプロセスとして地域の方々と「コラボ（連携）」してやっていきたいという意味で通称を「クロボ」としました。

参加する知的・発達障がいのある子どもメンバー（小・中・高生）は基本的に1年間固定で、2015年度は12名が参加してくれました。活動のなかでは、口話・手話（ジェスチャー）・絵カードなどの多様な言語・非言語的コミュニケーションを意識的に使用することで、コミュニケーションをバリアとしない環境づくりを心がけています。毎回、平均15名ほどの学生や市民がボランティアとして参加し、活動をリードしてくれています。

クロボの主な活動は、スポーツ活動（午前）とアート活動（午後）です。今年度は初年度ということもあって、いずれの活動でもいろいろと試行錯誤

を行ないました。スポーツ活動については、知的障がいスポーツの団体である「スペシャルオリンピックス日本・山梨」と協働でのフロアホッケー、アート活動については、地域交流研究センター地域美術教育分野と協働でのジオラマ・絵本づくりに落ち着きつつあります。この後は、スポーツ活動・アート活動でのそれぞれの取り組みについて、今年度中心になって運営を担った学生たちの感想です。

『スポーツ活動（フロアホッケー）』

清水万里子（初等教育学科4年）

フロアホッケーに参加し、このスポーツの楽しさだけでなく、一緒に参加した人たちの様々な面を知れた気がします。普段から知っている人もそうでない人も一緒に活動することで、その人の表情や思いをより間近で感じ、何も言わなくても互いのことを伝え合う素晴らしさを体感しました。

三浦 悠（初等教育学科4年）

フロアホッケーを地域に根差した活動にするために、クロボを通して実践を行なってきました。1年間の活動から、ようやく理想とするゴールへの土台作りができつつあると感じています。卒業まで残りわずかですが来年度後輩に引き継ぐに当



たり、自分自身がやるべきことをしっかりと果たしていききたいです。

『アート活動』

山崎陽子（初等教育学科4年）

第一印象は、とにかく衝撃的。「なんだこの子たちは!」。彼らの作品に、制作中の一心不乱な姿に、惹かれて突き動かされてもつずく1年が経ちます。同時に、活動を開始してから、彼らのために私には何が出来るのだろうとずっと目問し続けました。「表現」という自分のなかの当たり前を再考するきっかけを与えてくれたことに感謝します。

木村有里（初等教育学科4年）

このプロジェクトを通して毎回感じることは、子どもたちの発想の豊かさと面白さです。型にはまらない自由な作品にいつもびっくりさせられます。障がいの有無に関わらず、話したり一緒に活動したりするのが毎月の楽しみです。

永田 咲（初等教育学科4年）

私はこの1年間アートと向き合い、作品から伝わるアーティストの思いや新鮮な発想の魅力に気づくことができました。表現方法の1つであるアートを通して、アートにしかない表現を実践のなかからもっと探っていききたいと思っています。

フロアホッケーについては、11月から毎週木曜日の4限の時間に大学体育館で学生を中心に自主練習を重ねてきました。定期的に練習を行なったこともあって、格段にスキルがアップし、ゲームを楽しめるレベルにまで上達しました。1月27日水曜日には、夕方の時間を使って、市民向けの『障がいの者スポーツからユニファイドスポーツへフロアホッケー体験を通して』という公開ワークショップを開催しました。

クロボの活動の報告やボランティア募集に関しては、随時、地域交流研究センター地域特別支援教育分野のブログに掲載していますので、定期的にチェックしていただければと思います。

（つつみ ひでとし・本学初等教育学科教員）



ワークショップのポスター



地域美術教育分野から 地域に発信する表現活動

— 新たな時代のものづくりに向けて —

■ 布山浩司

初等教育学科図工・美術教室ではこれまで、地域美術分野においてさまざまな取り組みを行なってきました。本年度は新たな取り組みとして地域交流研究センターサテライト企画「てん・てん」をはじめ地域特別支援教育分野のプログラム「クロボ」にも参加しました。

*【参照URL】 <http://www.tsuru.ac.jp/studyroom/tokubetsusen/>

私は、本年度から本学に着任しました。専門分野は立体造形をベースとしたデジタルアーカイブや3Dに関連した研究で、また中学教員としての勤務歴があり特別支援学級を含む学級経営や中学美術の授業経験があります。

私はこれまでの経験をもとに、宝保育所造形教室や谷村第二小学校陶芸講座などのこれまでの取り組みと、「てん・てん」や「クロボ」などの新たな取り組みの企画、運営に携わりました。ここでは紙幅の都合から「てん」を描くと「てん・てん」についてご報告します。その他の活動や以下でご報告する活動の詳細は本学地域交流研究センターブログを参照ください。

*【参照URL】 <http://www.tsuru.ac.jp/subject/chilikikounyu/>

「てん」を描くと「てん・てん」

この取り組みは図工・美術教室がこれまで行なっ

きた宝保育所造形教室の活動の一つで、本年度は6月29日(月)に都留市立宝保育所で絵本『てん』(ピーター・レイノルズ著 あすなろ書房出版)をもとに行なった活動です。宝保育所では、ハガキ大の紙に自由に「てん」を描きました。まず制作に入る前に絵本『てん』の読み聞かせを行ない、そのあとで絵の具や色鉛筆、クレパスなどの画材とともに、子どもたちが目にしたことのないくらいたくさんの紙を手渡し、ただ一言「失敗を恐れずどんどん描いてね!」と制作を促しました。その結果、子どもたちは生き生きのびのびした作品をたくさん作ってくれました。

また、新たな企画として市立図書館において作品「てん」の展示「てん・てん」を企画しました。これは、子どもたちにただ作品を描くだけではなく、保育所を飛び出して友だちの作品のよさを感じ普段とは違った雰囲気作品を味わってほしいと願うとともに、「少し背伸びした気持ち」で公共空間における鑑賞のマナーについて気付いて欲しいと考えたからです。

この活動には図工・美術教室の4年生4名が主体的に関わりました。彼らは当日の制作活動をイメージしながら、子どもたちに活動のねらいをどのように説明するべきか、どのようなことが起こりうるか、といった議論を繰り返し、入念に準備を行っていました。



絵本「てん」の読み聞かせの様子



都留市立図書館「てん・てん」の展示風景

「てん・てん」の会場では保護者と参加した子どもへインタビューを行ない「楽しかった」「またやりたい」などの子どもの言葉に感激していました。また、これらは卒論などへ発展するなど、教職に関する研究活動としても成果があったと思います。

新たな時代のものづくりにむけて

私は、地域美術分野の活動「谷村第二小学校陶芸講座」などこれまでの活動に加え、発達援助部門で新たに企画された「クロボ」にも参加し、たくさん子どもや地域の先生と知り合うことができました。

図工・美術を含め今後のものづくりでは「コミュニケーション」と「価値観の多様性」が大きなキーワードとなると私は考えています。21世紀の多様化したものづくりは、進化したテクノロジーを多用し機械で作ることがよいと認識されがちです。また子どもの作った作品は大人が作った完成度の高い作品に比べて劣る、といった発想もあるように思います。

「てん」の制作では我々が想定した以上にさまざまな作品が生まれ、関わった大人を驚かせました。保育園の子どもは幼いながらも表現において大人と価値観を共有する想いやイメージを持っていると感じました。また、谷村第二小学校陶芸講座では、陶芸制作を通して大人も子どもも等しく関わり合う様子が印象的でした。谷村第二小学校陶芸講座に参加した子どもの一人が本学60周年記念ロゴマークを陶芸で作ってくれました（写真参照）。そこには大人や機械では作れない良さや想いを強く感じ、とても意義深いものがあると思いました。

このように、21世紀の世界において我々が目指すべ

きものづくりとは、機械で作った精密なもの、大人が思想や修練を重ねて作ったもの、そして子どもが幼い感覚や想いを注ぎ込んで作ったものなど、さまざまな良さを追求できる多様性が重要であると考えています。今後も私のこれまでの経験を踏まえ、さまざまな価値観を多くの人々と共有できる活動を目指していきたいと考えています。

文末ではありますが、本年度の活動を支えてくださいました地域の皆様、参加してくれた子どもたちに深く感謝申し上げます。

（ぬのやま こうじ・本学初等教育学科特任准教授）



子どもの作品（60周年記念ロゴ）



造形教室の様子



陶芸講座の様子

美術と情報が連携した図工教育における ICTを活用した新しい教育支援プログラム ―『たからばこ作戦』の実践を通して―

■ 杉本光司

センターの部門活動の一つ「発達援助部門」のなかの情報教育と美術教育の教員が連携することによる新たな地域貢献事業の一つとして取り組みを行ないました。これまで小中学校の教員とは研究会や研修会を通じての連携活動が主でしたが、この取り組みは、小学校における「図画工作科」という科目にしばり、そこにICTを活用した新しい教科教育の仕組みを作成することにより、その教育的効果、他の分野への活用の可能性、地域連携の可能性などについて実践・検証を行なっています。

取り組みの目的

本研究では、図画工作科の特徴である表現活動を基盤として、ICTを用いた双方向型のコミュニケーション活動を行なうことによる、①子どもたちの「表現・鑑賞・評価」に対する意識の広がりや明らかにすること、②ICTを活用した活動の有用性を検証することにあります。

実践研究としては、表現（作品）をデジタル画像化して、データベースにより管理することで参加者同士が共有し、子どもたちの活動のフィールドを概念的な意味において教室から地域、さまざまな世代、更には他の地域へとつなぐことを目指します。

これまで図画工作・美術分野において作品をデータベース化し、教育に活用する試みはほとんどあり

ませんでした。本研究ではこれまで個人的研究において開発してきた独自のシステムを更に検証し、その有効性も探ります。

取り組みの目標

本研究ではICT技術を用いて、これまでの美術教育の既存概念を超えて、新たな概念を指し示すことにあります。したがってコンパクトかつ実験的な研究を行なう必要があります。

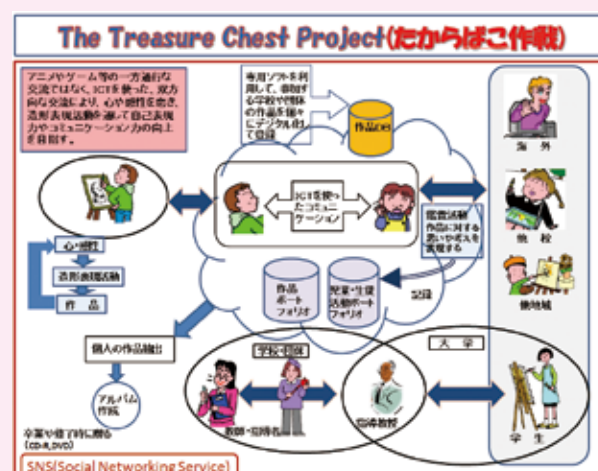
新学習指導要領「図画工作」に示すとおり「表現活動」と「鑑賞活動」の育成による造形的な能力の向上を目指すべく、子どもたちの自己表現力やコミュニケーションへの意識の広がりを明らかにします。同時に、ICTを使った美術教育の新しい方策について検討します。実践研究はこれまで研究協力関係を築いてきました「都留市立旭小学校」、「兵庫県西宮市の造形教室こどもアトリエ」をフィールドとします。

取り組みの特徴

算数や理科といった能力を数値化しやすい教科では、教材データベースを利用した小学校における実践例は多く存在しています。しかし、能力や指導効果が数値化しにくい教科である図画工作などでは、デジタルデータベースを利用した例は、ほとんど見



たからばこ専用サイトにおけるトップ画面



たからばこ作戦の全体概要図

受けられません。

図画工作において「表現」と「鑑賞」は一体化した活動であり、表現活動を行なう上で鑑賞者に対する意識を持つことは自然かつ重要な課題です。多様な鑑賞者を意識できること、多様な評価を受けることは、造形表現の基礎的な能力向上のみならず、豊かな人格を育むことも大切です。しかし、過疎化の進んだ地域の小学校では鑑賞者は数少ない同級生や在校生、教師が中心であり、表現と鑑賞に対する豊かな意識の広がりには期待できません。

そこでICTを使ったコミュニケーションのプラットフォームを作ることにより、子どもたちが地域や世代を超えた関係を持ち、表現や鑑賞について豊かな意識の広がりを持つことが期待でき、同時に、図画工作における新たな概念の構築につながることを期待できます。

研究体制

本研究は都留文科大学を中心として都留市立旭小
学校、こどもアトリエ（西宮市の造形教室）を実践
研究のフィールドとして行ないます。

◇プロジェクトメンバー

鳥原正敏（初等教育学科教授…総括、プロジェ
クト代表）

杉本光司（情報センター教授…システム構築、
運用）

堤 英俊（初等教育学科講師…臨床教育的アプ
ローチ）

布山浩司（初等教育学科特任准教授…データベ
ース構築、展示や鑑賞方法の研究）

大輪知穂（情報センター職員…データベース構
築、運用）

◇研究協力者

都留市立旭小学校担当教諭1名

上田由紀子（西宮市の造形教室「こどもアトリエ」
主宰）

検証方法について

研究者・小学校教師・大学生・他の地域の指導者
による立体的な考察を行ないます。1年に一回、カ
ンファレンスを開催し、関係者が集まって研究成果
について確認します。本研究の目的は①子どもたち
の「表現・鑑賞・評価」に対する意識の広がりを明
らかにすること、②ICTを活用した活動の有用性
を検証することです。これらを数値化して検討する
ことはできません。そこで本研究では、子どもたち
の観察・インタビューと関係者によるカンファレン
スを通して研究結果を導き出します。

著作権や個人情報への配慮

作品データベースを作成することから、全ての作
品に対して著作権が発生するため、初めて参加する
際には、データベースへの登録、ダウンロード、展
示、印刷などの実行に対しての説明を行ない、同意
を得ることが必要です。

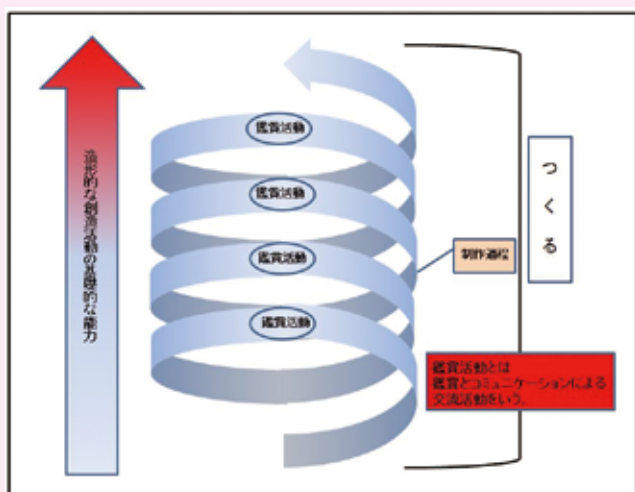
本取り組みでは、小中学生などが参加するため、
保護者に対して理解を求める説明会を開催し、依頼
文書と承諾書を作成し、同意・協力を求めます。ま
た、作品に付帯する個人情報についても同様な方法
で保護者の理解を得ます。

著作権や個人情報の保護への対策として、シ
ステム全体を会員制のSNS(Social Networking
Service)で運用し、インターネット上の自由検索や
閲覧の場には公開しません。

まとめ

今回の取り組みは子どもに対する教育支援という
面だけに限定せず、大学生にとっても、子どもたち
との鑑賞活動や評価を通じた交流活動が、どのよう
な面に効果をもたらすか、問題を提示するかななど
についても検証する必要があると感じています。更に
本学のような教職志望の多い大学にとっては、学生
がこのような研究活動実践に参加することにより、
教科教育的知識の習得だけでなく、学生自身の自己
表現力やコミュニケーション能力の向上にも大きな
効果をもたらす有効な手段であることを検証するこ
とも大きな課題です。

（すぎもと てるじ・本学情報センター教員）



図画工作の活動イメージ（表現活動と鑑賞活動）

都留の自然と人のくらし

■ 福島万紀
■ 内山美恵子

「暮らしと仕事部門」は本年度より福島と内山が任せられ、活動が改めて始まりました。まだ手探り状態ながらも、まずは東桂地区の人々の暮らしと仕事に寄り添ってみます。キーワードは「水」。水をテーマとして、地域の人々の生活と仕事を二つの観点からクローズアップします。一つは自然科学的な観点から、地域の山・河・地下での水循環とその水環境、もう一つは社会的な観点から、地域産業・生活への水利用を明らかにしていきます。

東桂地区に湧水が多い理由

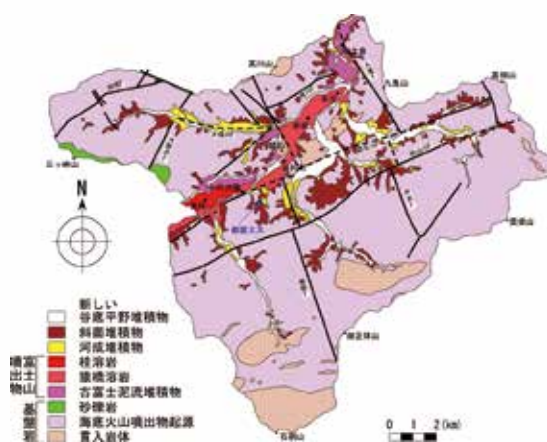
■ 内山美恵子

山梨県都留市田原、都留文科大学のある場所です。大学は都留市中心地から少し南に下がった沢の中にあり、自然科学棟の屋上からは地域の様子がよく見てとれます。都留市は南西から北東方向へ流れる桂川が作った谷底平野に発達しました。ここは関東平野から富士山へぬける道の途中にあたるため、縄文時代の遺跡があり、古代や中世の住居跡など遺構があり、城下町であり、遠い昔から延々と人々の生活が営まれてきたことがわかります。人々の暮らしを支えてきたものは何でしょうか。さまざまな要素が考えられますが、生命を維持するには動物も植物も菌にも、液体の水が必要不可欠です。そう、都留は生命を支える清冽で豊かな水が湧く郷なのです。

水の源の一つは富士山です。およそ2万年前、古富士火山が崩壊し、昔の桂川の溪谷に土石流が何度も流れ下りました。これがたまってできた地層を古富士泥流と呼び、都留の大地の基礎を作りました。その後、新富士火

山が活動を始めます。この活動はまず、大量のさらさらと流れやすい溶岩を噴出することから始まりました。この時の溶岩が2回、桂川の谷の中にも流れ込みました。1度目はおよそ8500年前の猿橋溶岩、2度目はおよそ8000年前の桂溶岩です（図参照）。溶岩には亀裂がたくさん入っているのを伝えて水が浸透・流動し、優良な帯水層となることが知られていますが、都留では桂溶岩がこの役割を果たしています。桂溶岩は谷の北側寄りを流れて十日市場で止まったため、桂溶岩が地表に露出している場所です。夏狩湧水群を作ったのです。

ここまでは分かっているのですが、ではこの水は溶岩の中だけを流れているのでしょうか？ この湧水は富士山に降った雨や雪だけが湧き出しているのでしょうか？いつも同じように湧いているのでしょうか？ まだわからないことがたくさんあります。これらの謎を解くた



都留市内の地質図。地表面に表れている地質を形成された時代や岩石の種類によって色分けして示している。都留市の大半を占める山の部分は古い時代に形成された岩石でできており、基盤岩となっている。中央の谷に沿って、富士山からの古富士泥流や溶岩が分布している。都留市史 資料編 地史・考古（1986年都留市発行）付図を編集した。

めに、今年度から湧水の観測を始めました。どのように調べているのか、詳しいことは、プロジェクト研究の報告が37ページにありますので、そちらをご覧ください。湧水の保全対策のための提案ができることを目標に、研究に取り組んでいきます。

(うちやま みえこ・本学COC推進機構特任教授)

湧水を利用する暮らしのこれからを探る

■福島万紀

都留市の湧き水はこれまで、どのような人々がどのようにに利用してきたのでしょうか。2015年12月10日に開催した平成27年度地域交流研究センター研修会「水が育む潤いある生活を守って―都留市東桂地区の活動から―」において、十日市場・夏狩湧水を守る会会長の水庭次男さんをお招きし、現在の水をめぐる現状、問題とその解決にむけた取り組みについてお話をいただきました。

水庭さんのご自宅がある永寿院の庭とその周辺には、大きな湧水が4カ所あります。永寿院の庭の湧水場にはコップが置いてあり、その場で湧水を汲んで喉の渇きをうるおすことができます。近所の方々も定期的に湧水を汲んで生活に利用しており、東京方面から定期的に水を汲みにくる人もいます。

このような湧水の利用は、ずっと昔から続いていたものですが、昔と今とでは水の利用をめぐってさまざまな変化が生まれました。近代的な生活様式の普及にともない生活排水が増加し、湧水と排水がまざる場所がみられるようになりました。また農業のみならず養殖業や製造業にも湧水が利用されるようになり、さまざまな人々が異なる目的のために湧水という資源を利用するようになりました。さらに、湧水が流れる川の周辺へのゴミの投棄なども増加し、湧水をめぐる環境をどう守り、持続的に利用するかが課題となっています。

湧き水が流れる川には土砂がたまりやすい場所が

あるため、防災上の問題となることがあります。東桂地区をはじめ都留市では、毎年4月初旬の日曜日に地域の方々が集まり、川の土砂などを掃除する「定式」とよばれる活動を行なっています。水庭さんは、湧水や川の流れにかかわるさまざまな立場の人と話し合い協力しあいながら、いかに水をきれいに保っていかについて目的を共有し、取り組みを進めることが重要である、と主張します。

「都留市を流れる水と暮らしと農のかかわりを探るプロジェクト」はまだ始まったばかりですが、まずは地域の方々にお話をうかがいながら、湧水の持続的な利用をめぐる問題とその解決策を探る予定です。

(ふくしま まき・本学社会学科
環境・コミュニティ創造専攻教員)



永寿院の庭にある水汲み場。
ポリタンクなどに水を大量に汲む
際には、別の水汲み場を使用する。

■生きものに親しむ キャンパスづくり■

フィールド・ミュージアム部門では、キャンパスを「自然に親しむ入り口」と位置づけています。そこで、附属図書館ビオトープや1号館に隣接する「つるりん」の手入れと世話を行なっています。このほかに、キャンパスでリスとの出会いを楽しむ「キャンパスにリスを呼ぶ会」、ムササビの観察を楽しむ「ムササビ・ライブカメラ事業」、テントウムシの越冬を通して自然の動向を探ろうとする「テントウムシの越冬を見守る会」などの活動に取り組んでいます。



自然とかかわる楽しみ

■加藤咲季

ビオトープでは、植物と関わることで毎回新たな発見をすることができます。週に1回の手入れでも、1週間で景色が大きく変わっていて、季節を感じることもができるのも魅力です。この活動に参加する前は、植物の名前も、手入れの方法もなにひとつわかりませんでした。授業で聞いた植物も、右から左に抜けていく、といった感じでした。



しかし、活動を通して、この花は香りがいいとか、新芽はこんなにやわらかいんだ！といった五感を刺激する植物たちに囲まれ、自然と植物と関わることに楽しくなっていました。さらに木が弱っているから、日当たりをよくするために木を切ってみたり、ビオトープができてから一度も手入れしていなかった池に足を踏み入れてみたりと挑戦の連続で、ふだんできない貴重な経験をさせて頂けているこの環境に感謝しています。大学生活の4年間でどのくらい変わるのか、変えることができるのか、これからも楽しみです。

（かとう さき・社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年）

気持ちのゆとりをくれるビオトープ作業

■武田美月

私は1年生の時から学校の図書館横のビオトープの作業をしています。きっかけは1年生の時に取っていた環境の授業で先生から誘われたことでした。そこから友だちも誘ってビオトープの作業グループを作りました。当初は3人から始めて、2人増えて5人になりました。みんなの授業が空いている時間に合わせて週1回作業に取り組んでいます。作業は枝の剪定がメインで、花の植え替え、水やり、掃除などもします。活動は年々行ないませんが私は5月頃のビオトープが1番好きです。植物の葉が一気に伸び

て生き生きとします。冬場、植物は生長せず枯れてしまったのかなと心配になるほどなので、葉が生い茂る季節になるとホッとします。毎年夏に向けて百日草を植えます。花が100日咲き続けるという百日草。色鮮やかに咲く花を見て毎年元気をもらっています。植物の世話をしていると季節を感じます。私にとってビオトープ作業は日々忙しく過ぎていくなかで気持ちのゆとりをくれる時間です。

（ただだ みづき・社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年）



巣箱に巣材を運び込むムササビ



ムササビの滑空

「ムササビに一番近い大学」から、 新たな一歩を

■ 加藤明香

今年もムササビが巣箱を利用してくれたため、一年をとおして観察をおこなうことができました。美術棟横の巣箱はお気に入りの住処としてすっかり定着したようです。明け方、巣材をくわえて巣箱に帰ってくるようすが頻繁に確認できます。特に冬にかけては何度も帰って帰ってきているようで、ライブカメラを観る度に巣材が増えていました。季節や温度によって変わる寝相も昨年と同じ格好のときもあれば見たこともない格好で寝ていることもあります。観察を続けていると出てくる、この行動はもしかしたらこういう理由があるのかもしれない、という予想が、さらに観察を重ねていくにつれ確実性を帯びていきます。ムササビの今までにない姿を観たときにはワッと心が踊り、ムササビに近づけているようでとても嬉しくなる瞬間です。

さらに12月には恒例となった「ムササビ観察会」をおこない、今年も多くの方が参加してくれました。天候も良く、寒さも厳しくなかったため観察に専念することができました。青みを帯びた灰色の空を5頭ものムササビが滑空していききました。

そして今年も、本学にムササビを見に来てくれる方や本学の話のなかでムササビが登場することが確実に多くなっていました。ムササビに一番近い大学を目指して、という目標は達成できつつあるのでは

ないでしょうか。新しくなる地域交流研究センター内にはムササビをはじめとする本学周辺の自然をお伝えするブースを設ける予定です。もっとたくさんの方にムササビのことを知っていただき、興味を持っていただくべく今年も積極的に新たな活動をおこない、皆さんがあきらめないようにしていきたいと思っています。

(かとう もえか・初等教育学科3年)



夜の森で滑空の準備をするムササビ

☆キャンパスのムササビや自然の情報、フィールド・ミュージアム部門の活動などは、本学のホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp/>) の「ムササビライブカメラ」の頁でご覧になれます。

「つるりん」で学ぶ生きものたちの世界

■ 別宮有紀子

本学には2つのビオトープがあります。1つはトンボと蝶をテーマにした水辺の生態系を模したビオトープで、12年前の附属図書館の完成と共に誕生しました。2つ目は、本学の1号館とグラウンドの間にある細長い林で、まだビオトープという言葉もなかった40年前に本学の教職員が苗木を植えて創った林です。広さは10m×60mと狭いですが、多様性が高く、40年前に植えられたブナやミズナラ、ホオノキ、ケヤキ、エノキ、イヌシデなどが樹高20mを超える大木に育っています。40年という歳月の間に、動物や風によって運ばれたさまざまな種子が発芽・定着し、多様な植物が見られるようになりました。この林を私たちは「つるりん」という愛称で呼び、初等教育学科の授業「生物学実験Ⅰ・Ⅱ」や「専門演習Ⅰ（生物学）」のなかで、毎年、自然観察や環境調査、生物相の調査などを行っています。

学生たちは「つるりん」の生きものを観察・調査することで、校舎のすぐ後ろに暮らす動植物や、水や土の中に住む小さな生きものたちの存在に気づきます。初めは、「きれい」「可愛い」「気持ち悪い」「嫌」「汚い」と口々に叫んでいた学生たちが、調査を通して、どんな生きものがどんな場所にどのように暮らしているのかを知り、他の生きものとの関係や環境要因との関係などについて考察できるようになります。そして「気持ち悪いけど、まあ奴らもここで生きてるんだし」とか、「この植物はきつと鳥に

運ばれてここに定着したんだね」とか、「なぜここにこの植物が多いのだろう?」といったさまざまな気づきや疑問、すなわち「自然を観る目」を手に入れた、自然を客観的に見られるようになります。このように周りの生きものの存在に気づき、その生きものの特徴や性質を知ることが、私たちが自然と調和した生き方をするために欠かせません。小学校の先生を目指す彼らが、将来、全国各地で子どもたちと一緒に地域の自然について学び、自然の大切さを教えられる教師になって欲しいと願っています。私の想いはさておき、学生たちは「つるりん」で何を学び、感じているのでしょうか? 学生たちの声をごく一部ですが以下に紹介します。

(べっく ゆきこ・本学初等教育学科教員)

「つるりん」の生態系について わかったこと

半年間の授業をとおし、植物や生き物に対する興味・関心、見方が大きく変化した。葉の特徴で樹木の種名が同定できることや、データを取ることで目で見ても見えなかった関係性や特徴などさまざまな



学生たちによる
「つるりんの生きものたち」の展示

ことが見えてくることも知った。また、このことを学ぶことによって葉への親近感を覚え、通りがかりにふと見た葉が何であるか気になったりと、樹木や植物に興味を持てるようになった。

生き物に関しては、慣れることで抵抗を抑えられること、それぞれの役割を知ることを受け入れられることを学んだ。例えば、トラップの中に黒い昆虫が大量にいた時、黒い昆虫＝ゴキブリと考え、拒否感が生まれて怖がっていたけれど、よく見るとオオヒラタシデムシであり、よく観察することで抵抗がなくなってきた。自分の思い込みで拒否するのではなく、よく見て知ろうとすることで受け入れられると知った。また、ダニなどの微生物に対して悪いものという認識をしていたけれど、微生物は分解者としての働きを持ち、一概に悪いものと認識してはいけないと感じた。生き物について実験や調査をし、知ろうとすることで気持ちも変化し、興味を持てることが分かった。この授業をとおして生き物の真の姿を見ることができ、またこの発見を教師を志願する者として子どもたちに伝えていきたい。この経験をした私だからこそ、表面だけではない生の自然の姿を教えることができると思う。この経験を活かした学びを取り入れ、子どもが興味関心を抱き、生の自然を受け入れられる学びにつなげていきたい。

吉岡沙代（よしおか さよ・初等教育学科3年）

今まで見るだけで気持ち悪い！とあまりよい印象がなかった虫たちに、今回の観察を通して、"かわい"とまで思えるようになったことに驚いて

います。今まで必要以上に虫たちを殺してしまっていたことを反省しています。人間には人間の世界があるように、虫たちにも虫たちの世界があり、面白いなと思いました。将来この実習が使えるような機会を自分で作りたいと思いました。子どもたちに私たちと同じような体験をさせることで、子どもたちが虫を嫌い、意味もなく殺してしまつことのないよう、また虫に興味を持つてくれるような教育をしたいと思いました。

八瀬尾麻美（やせお まみ・初等教育学科3年）

この授業で水の中や水中の葉っぱの表面にいる微生物を観察・調べることで、一見汚そうに見える水の中には、たくさん生物が暮らしていて、濁っているから生活にくそうに私たちには見えても、その小さな池の中では、食べたり食べられたりしながら、きちんと生態系が成り立っているということがわかった。ため池に生息する微生物や藻類、水草、虫や魚などの生物たちは、バランスよく生態系のなかの物質を循環させ、互いに関わりながら生活している。教科書に描かれている食物連鎖の絵は簡単にまとめられていて理解しやすいが、実際はそこに生息する植物の種類や特徴、またそれらを好んで利用する動物や、光や土壌などの環境条件によっても大きく異なるため、食物連鎖の矢印はいろいろな方向に無限大にも広がっているのではないかと考える。

松島瞳（まつしま ひとみ・初等教育学科3年）



「つるりん」の外観
(撮影：李艶茹)

キャンパスにリスを呼ぶ会

■鳥原正敏

「キャンパスにリスを呼ぶ会」が発足して本年度で5年が経ちました。これまで、クルミの苗木の移植や餌台の設置などを行なうとともに、会員に向けてメールニュースを発信しています。この会の取り組みに共感してくださるかたも増えていきます。そして今年度は、キャンパスに設置した餌台についてリスがやってきたことが確認できました。今年度一年の活動をメールニュースをもとに振り返ってみました。

2015年9月30日 クルミの苗木に名札を付ける

キャンパスに移植したクルミの苗木や自生していたクルミの木に名札を付けました。移植した日付などが白い板に記入してあります。

この名札は、職員のかたがたに書いていただきました。「ムササビの森」、二号館周辺、自然科学棟裏の林などのクルミの木に札をつけてあります。ぜひこの名札を探して生長を見守ってください。

2015年9月30日 ついに…

キャンパスに設置した餌台にニホンリスが来たようです。

キャンパスには5カ所にニホンリス用に餌台が設置されていますが、「ムササビの森」に設置した餌台の下にニホンリスが食べたと思われる多数のクルミの食べ痕が落ちていました。

この餌台は、クラブハウス棟の入り口にある木製の看

板が目印です。ぜひ食べ痕を探してみてください。なお、写真1は、ニホンリスが食べたクルミの食べ痕です。殻を二つに割って食べるのが特徴です。

2015年10月13日 クルミ拾いをしました

今年も都留市十日市場の熊太郎神社でクルミ拾いをしました。学生・職員の有志により、30分ほどでバケツ3杯を集めました。およそ2000個といったところでしようか。このクルミはリスや野ネズミの食物にします。これからリスや野ネズミとの出会いや交流をみなさんと楽しみたいと思います。



次第にこの会の共感の輪は広がっており、今年度は、大幡にお住まいの岩村善吉さん（現在、都留文科大学美術棟の職員）が散歩の途中でクルミを集めてくださいました。水洗いした美しく見事なクルミです（写真2）。

なお、この「キャンパスにリスを呼ぶ会」の入会は、活動に共感していただけるかたならどなたでも参加できます。入会していただいたかたには、不定期ですがメールニュースをお届けします。気軽に地域交流研究センター事務局までお問い合わせください。

（とりはら まさとし・地域交流研究センター長

「キャンパスにリスを呼ぶ会」会長



写真2 岩村善吉さんが集めてくださったクルミ



写真1 ニホンリスがクルミを食べた痕
（撮影日：2015年9月30日。「ムササビの森」にて）

研究・教育活動

フィールド・ミュージアム部門では、大学での研究の成果を教育に活かす取り組みをしています。これでは、都留文科大学附属小学校で行なった授業を紹介します。

都留文科大学附属小の環境教育

■小口尚良

都留文科大学附属小学校は、校舎と森が隣接し、窓から四季折々の森の景色、ムササビ、リス、ヒミズ、さまざまな野鳥を見ることができるといふ自然環境に恵まれた学校です。学校林も保有しており、これらを活用して1年生から6年生まで体系的な環境教育を行なっています。

平成27年度の活動

- 1年生 学校林散策、ネイチャーゲーム等
 - 2年生 ふれあいの森散策、ネイチャーゲーム等
 - 3年生 学校林散策、森の生き物調べ
 - 4年生 ふれあいの森での動物観察 クルミ拾い 野鳥の巣箱作り
 - 5年生 学校林で林業体験（枝打ち・間伐） 薪運び 椎茸植菌
 - 6年生 学校林で植樹 下草刈り
- 縦割り班 ふれあいの森観察スペースでの餌付け
（リス、野ねずみ、ヒミズ）
サイエンスクラブ ふれあいの森観察スペースの整備

低学年では、都留文科大学の北垣憲仁先生、県ネイチャーゲーム協会の方を講師に招き、自然体験学習を中心に進めています。学校の裏山にはエノキの木が何本もあり、幼虫がエノキの葉を食べて育つオムラサキもよく飛来します。3年生は、昆虫の学習で越冬していた幼虫を見つけ、成長の様子を観察しました。4年生は、北垣先生の指導の下、リスや野ねずみ、ムササビ、野鳥など身近な野生動物の暮らしやつきあい方を学びました。高学年は、里山の自然と人とのつながりを、林業体験学習で学びました。5年生は椎茸植菌、枝打ち・間伐作業を、6年生は植樹・下草刈りを、森林組合の指導の下、学校林や学校の裏山で行ないました。

昨年度までは4年生が行なっていたふれあいの森観察スペースでの餌付けを今年度は児童会の縦割り班で行ないました。自分たちが置いた木の実やひまわりの種子を食べに来るリスや野鳥を、校舎の窓から観察することができました。また、今年度は、児童会で休み時間に学校横のふれあいの森で遊ぶ時間も作りました。5、6年教室の薪ストーブの焚き付け用にスギの枝や葉を集めたり、のこぎりで枝を

切ったりして楽しみました。

恵まれた自然環境のなかで多くの方々のご支援をいただき今年度も充実した自然体験活動ができました。

（おぐち ひさよし・都留文科大学附属小学校教諭）



ヒミズの観察方法を学ぶ



野生動物と出会う場所をつくる

展示活動

わたしたちの活動の成果を多くのかたがたと共有するために、フィールド・ミュージアム部門では市立図書館やミュージアム都留、富士急行と連携した展示活動に取り組んでいます。

市立図書館との連携事業

資料紹介展示 『昭和史かるた』

～神田甲陽

私が体験してきた

昭和の時代

2015年10月27日～11月8日 都留市立図書館閲覧室

【企画】 都留市立図書館、神田甲陽

【協力】 都留文科大学フィールド・ミュージアム

■都留市立図書館

甲府市在住の神田甲陽さんは、戦後70年にあたりご自身が見てきた昭和の時代をいろはかるた^(※1)で再現しました。当館では都留市教育委員会が8月に開催した「平和を願う折り鶴の集い」及び「折り鶴壁画」の制作（5月～8月）に続く、「戦後70年企画」として秋の読書週間にこのかるたの展示会を開催しました。

昭和6年の満州事変から戦中・戦後・高度経済成長期とその後を経て平成に至る昭和の時代を、図書館の閲覧室を歩きながら辿れるよう、かるた48枚の絵札の元になった色紙絵と読み札（色紙版）を配置し、さらに、かるたに1枚1枚に読まれた年代に地域で起きた出来事48件の解説パネルを添えました。解説は市立図書館が所蔵する記録や資料を参考に記述し、パネルに添えた写真は、フィールド・ミュージアムのオープンアーカイブ『奥隆行コレクション』から借用しました。またパネルの切り出しを都留文科大学の北垣憲仁先生とフィールド・ミュージアムの学生さんたちにお願いました。短い準備期間にもかかわらず、すばやく対

応していただき大変助かりました。

図書館と「博物館」に共通する「記憶」と「記録」というテーマのもと、市立図書館とフィールド・ミュージアムが共同で開催した展示や行事の様子は、毎々『地域交流センター通信』に報告し、特に『益子亮写真展』思い出の記録・時代の記憶^(※2)（2009）では、展示図録という形で私たちの図書館活動を記録として残すことができました。これも都留文科大学との連携によるおかげと感謝しています。

いま、「連携」「や」「交流」「絆」ということばが、ある種新規な感覚で安易に使われているように感じます。しかし、都留市（1959年市制施行）と都留文科大学の歩みが重なるように、市民と大学、学生の間には長い年月をかけ重ねられてきた交流とそのなかで築かれた信頼関係があります。「地域交流研究センター」の設立そのものがそのような歴史の上にあると改めて感じています。^(※2)

市立図書館とフィールド・ミュージアムの交流もその一部であり、そして、今回に限らず、まちの歴史と読書を中心に構成した「谷の町・史（ふみ）の里」「シリーズ展で再三利用してきた写真集（『奥隆行コレクション』）も、元郵便局長、奥隆行氏が数十年の歳月をかけ地域の人びとの協力で収集した写真（4058枚）を、北垣憲仁先生がさらに5年かけてデータベース化した地道な活動の成果であります。

今回のかるた展は、市立図書館の企画にフィールド・ミュージアムが協力するという形となりましたが、今後は原点到立ち返り、双方の日常的な共同研究の成果として展示会が開催できれば連携の意義は一層深まると考えています。

（※1）『昭和史かるた』（2015年発行）、神田甲陽・文、宇野五千男・画 末創一監修

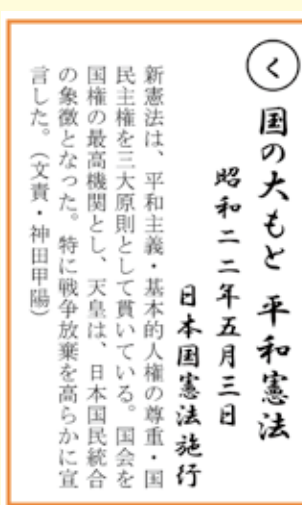
昭和の出来事をいろは順（年代順）に編集し、読み札の裏に神田氏による歴史解説をつけたもの。（都留市立図書館蔵）

【神田甲陽】真打講師、本名・末利光さん、元NHKアナウンサー

（※2）都留文科大学『地域交流センター通信』26号 巻頭文「都留文科大学『地域交流研究センター』の設立とその理念——10年の歴史を振り返り、これからを見通す」（畑潤）



昭和22（1947）年8月
谷村工商学校野球部甲子園出場
（写真は7月地域大会優勝時）



展示は、神田氏の直筆の色紙による

現在までの「わたしとあなたの都留アルバム」事業を振り返って

■ 森屋雅幸

以前より、本誌にてご報告させていただいておりますように、都留文科大学地域交流研究センターとミュージアム都留では、市内の写真とそれにまつわる記憶の収集と保存を行なう「わたしとあなたの都留アルバム」事業を進め、2月現在までに2313点の写真を集めることができました。ご提供いただきました方におかれましては、この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、この事業は平成23年度に都留文科大学地域交流研究センターとミュージアム都留との間で連携協力を構想するなかで提案され、それ以降、両者で話し合いを続け具体化させ、平成24年度から事業が開始されました。

これまで事業の成果を市民の方々にお知らせしようと、平成26年3月22日から5月6日にかけてミュージアム都留にて企画展「写真が伝える都留の思い出―未来へ贈る地域の記憶―」を開催し、翌年の平成27年3月20日から5月6日にかけては「写真でたどる都留の時代―未来へつなぐ地域の記憶―」を開催しました。展示の会期中には市内のみならず県内外からもご来館いただきました。平成27年にはこれまで収集した写真目録である『わたしとあなたの都留アルバムコレクション①』と「写真が伝える都留の思い出」展の図録を刊行して事業成果の普及

に努めました。また、平成27年11月5日には「NHKラジオ第1旅ラジ！」に出演し、全国に向けて事業を周知しました。

事業を振り返ると、この事業は単に写真と記憶の収集をするということだけでなく、これを通じて写真をご提供いただいた方々とのつながりを築くことができたことに気が付きました。写真をご提供していただいた方々からは、別の企画展に際して展示にまつわる資料や情報もお寄せいただいたり、あるいは調査へ同行していただいたりしており、こうしたつながりが現在の博物館活動に生きているということを実感しています。そう考えるとこの事業は資料収集という内容に加え、関係構築という内容を含んでいるといえます。

4月からは「あの頃の都留を歩く―写真・記憶・物語―」というタイトルで、高度経済成長期を経て変化した風景や人々の暮らしに関係した写真の展示会を行います。ぜひとも足をお運びいただければと思います。

事業は構想期間を含めて今年で6年目を迎えます。今後も都留文科大学地域交流研究センターと密な連携を取りながら事業を進めてまいりたいと思います。

(もりや まさゆき・都留市教育委員会)

生涯学習課 文化振興担当



写真提供者の方との宝鉢山調査の様子
昔の思い出をお話いただきました



『わたしとあなたの都留アルバム
コレクション①』

地域博物館の実現をめざして

■伊藤瑠依

現在、フィールド・ミュージアム部門では学内や都留文科大学前駅の待合室をお借りして、展示スペースをつくっています。しかしこれまでの展示では、せっかくの展示場所を活かしきれていないと思ったので、今後はより多くの人に私たちの活動や都留の魅力が伝わる場にできるよう工夫をこらしていきます。

さいにそのかたとお話ししてもらうほうが、魅力は伝わると思うのです。だから、展示物をきっかけに市内のほかの場所へと誘う博物館になればと思います。今はまずそのはじめとして、駅の展示と学内の展示をつなげるようなしかけから考えています。

もうすでに都留のあらゆる場所には、博物館の展示物となりうるすてきなものが散らばっています。たとえばハコモノがなくても、その場所に行くことで魅力を感じることができるよう地域博物館を、地域のみなさんとつくりあげてゆくことを夢見ています。

(いとう るい・社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年)

具体的には、ただ記事を掲示するだけでなく、その記事にまつわる「もの」を展示したり、『フィールド・ノート』の各号の特集に合わせた企画展を開催したりする予定です。私たちはこれまで、市内で見つけた魅力を文章で表現し、『フィールド・ノート』という冊子にすることでみなさんに伝えてきました。それをこれからは展示という形でもお伝えしたいです。あわせて、編集部員が展示の魅力を伝えるギャラリートークのような会の開催も考えています。こういった会を通して、展示を伝えるだけでなく、地域のみなさんの声をより身近で聞いたり、情報を共有したりすることで、今まで以上に交流ができればと思っています。

私はこういった展示を発端に、地域全体が博物館のようになることをめざしています。本当ならば展示物を見るよりも、現場に足を運び実物を見ることのほうがより魅力を感じるはずですが、持ってきた草花よりも現地でその生命力を目にしてみたらうほうが、文章で地域の人のやさしさを伝えるよりも、じつ



富士急行線都留文科大学前駅



富士急行線都留文科大学前駅の
駅舎にある展示室



展示替えは月1回のペースで行なう

■地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する■

フィールド・ミュージアム部門では、「地域の資料や記憶の保管庫」として、地域の生活の記憶や地域で過去に撮影された写真などを収集・保存する活動をしています。この取り組みは、ミュージアム都留と連携して行なっています。

オープン・アーカイブ事業の一年

■北垣憲仁

地域には、過去に撮影された写真や生活にまつわる記憶、生きものが残した生活の痕跡など、地域の未来や自然と人の共生のありかたを探るうえで貴重な資料が数多くあります。それらを調べ、保存することで誰もが活用できるようにしようというのが「オープン・アーカイブ」事業です。都留市内にある市立図書館やミュージアム都留と連携して写真を収集したり、展示を開催したりしてきました。こうして集められた写真は、2016年1月現在で約8000枚になりました。

これらのデータベースを活用する動きも広がってきました。今年度の1月まで、フィールド・ミュージアム部門で貸し出した写真は、41件です。またフィールド・ミュージアム部門の機関誌である『フィールド・ノート』の誌面にも多数使用されています。

なるべく多くの人に呼びかけて写真資料とその記録を充実させようと、都留文科大同学窓会のかたがたに提供を呼びかけたところ、岐阜県にお住まいの英文学科第一期生から当時の写真が20枚ほど送られ

てきました。写真には、本学がまだ現在の場所に移る前の建物や学生の様子が写されていました（写真1、写真2。キャプションはご本人のコメントから抜粋しました）。どの写真も、もう二度と撮影できない貴重な財産です。

フィールド・ミュージアム部門では、これからも「地域の資料や記憶の保管庫」の機能を果たすためにこの事業を充実させていきます。そして収集して保管した資料を多くのかたがたに使用していただき、地域の魅力を探り課題を解決する手がかりにしていくよう整備していきたいと考えています。

こうした事業は終わりがなく、地道な作業を継続していかなければなりません。市民のみならず本学の卒業生、市立図書館やミュージアム都留と協力しながら一枚でも多く未来の世代に遺していこうと思います。

なお、お手元に都留市内で撮影されたもので提供していただける写真がありましたらぜひ地域交流研究センター事務局までご連絡ください。

（きたがき けんじ・本学COC推進機構特任教授）



写真2 昭和40年12月、大学グラウンド。親睦を図るために地区毎に色々な会を持ったが、中部地区はソフトボール大会を開いた



写真1 昭和40年2月、大学1号館建設現場を見下ろして。自分たち英文学科1期生はこの校舎で授業を受ける事は出来なかった

■地域を調べ、記録し、学び合う■

わたしたちは、地域の自然や人びとの暮らしの知恵に学ぶことが大切だと考えています。学生みずから地域の自然や文化、人びとの暮らしを取材し、編集する『フィールド・ノート』もその取り組みの一つです。なお、この『フィールド・ノート』は、本学のホームページでもご覧になれます。

地域の良さをもっと知りたい

■南條 新

『フィールド・ノート』編集部では、編集部員それぞれが気になった都留の魅力について記事を書き、冊子として発行する活動をしています。この活動をとおして私は、私の知らない都留の一面に気づくことができました。

私は生きものを見るのが好きです。都留市は山に囲まれているうえ、市内を何本も川が流れています。そして山際ぎりぎりまで建物が立ち並んでいます。そのため、山や川へ直接行くことはもちろん、



夏狩にある十二天神社

通学路や家の近くでさえ生きものとの出会いの場になっていきます。これは私が見つけた都留の魅力であって、都留の魅力の一部でしかありません。私からはこう見えているけれど、ほかの人も同じようなところに魅力を感じているのでしょうか。それを教えてくれるのが『フィールド・ノート』だと思います。87号の特集は「木」でした。人の暮らしと身近な存在である木について取り上げて考えるものでした。私はこの特集のなかで、神社に生えている神木について取り上げました。きっかけは神社に生える木の巨大さに感動したこと。そこから、じつさいはどれほど大きいものなのか気になり、メジャーを持って神社へ行きました。私は木という言葉から生きている木を思い浮かべましたが、ほかの特集の記事は木材や木製のものなどを取り上げたものでした。小俣製材所へ行って製材について取材した人、こだわりの椅子を作っているアトリエに取材した人、そして宝鏡寺の羅漢像について取材した人。このように、木というひとつの言葉から考えることは人それぞれ違うのです。

『フィールド・ノート』には編集部員の数だけ記事があります。それは編集部員の数だけ違った視点があり、それぞれの目で見つめた都留が載っているということです。自分の目には留まらなかったけれど、じつは魅力的な都留の一面。『フィールド・ノート』編集部での活動はそれに気づかせてくれるものです。卒業までの残り2年間で、この地域の良さをもっと知っていききたいです。

(なんじょう あらた・初等教育学科2年)



やつおもて 八面神社にある切り株

『フィールド・ノート』から生まれる出会い

■ 長尾 泉

都留のまちには学生がたくさん暮らしています。そして、もちろん市民も同じです。お互い暮らしている場所がすぐそばなので、学生と市民の距離は近い、とよく言われますが、私は最近本当にそうなのかと考えています。多くの学生は自分の住んでいるアパートと学校やバイト先との往復がほとんどで、すぐそばに住んでいるはずの市民のかたと交流する機会などあまりありません。

私も『フィールド・ノート』に入っていないなければこんな深い付き合いにならなかったという人や、まず出会っていなかっただろうな、という人が何人もいます。『フィールド・ノート』では、自分の気になったことを調べるときに、地域のかたに取材をします。顔を合わせてお話を聞いていると、その人が歩いてきた人生をほんの少しだけのぞかせてもらうことができるように思うのです。人が持っている考えや経験をすべて自分のものにすることはできません。でも、あるひとつの話題や言葉に驚き、共感を持ったとき、その人の思い出に少しだけ触れられたように感じます。

今、私が『フィールド・ノート』で取り上げているのは、遊びの記憶です。話す人によって聞ける遊びの思い出はちがっていたり、共通するものがあつたり。当たり前のようにですが、聞き手としてこんなにおもしろいことはないです。遊びの話をするかたの目はみんな生きいきしていました。話し手が楽

しそうだと思き手もぐつと話に引き込まれていきます。その瞬間を味わえることが取材にいくなにより楽しみです。

都留のまちには私たち学生との出会いを楽しんでいる人があります。会にいくのを待っていてくれる人がいます。学生の多くはその機会にまだ恵まれていないだけです。おもしろい話を聞かせてくれる人がこんなにすぐそばにいるのにもったいない。さまざまな人生を送ってきたかたと出会い、お話を聞けること。私にとってそれが『フィールド・ノート』をやっている一番のやりがいで、そんなかたちたちのおしゃべりの時間をこれからも大事にしていきたいと思っています。

(ながお いずみ・初等教育学科2年)



2015年12月発行の『フィールド・ノート』87号



嬉しそうに思い出を話してくださる



地域のかたにお話を聞きに行く

地域交流研究センターでは、「地域交流研究Ⅰ」、「地域交流研究Ⅱ」、「地域交流研究Ⅲ」、「地域交流研究Ⅳ」という教養科目を開講しています。今年度の授業を振り返ります。

「地域交流研究Ⅰ」

—— 地域交流から得た
知見を普遍化するためには
どうすればよいのか？ ——

■ 山口博史

説していくことに力点を置きました。授業で解説を加えた言葉としては、「コミュニティ」、「住民」、「市民」、「自治会・町内会」、「まちづくり」、「NPO」、「RCA (Rotating Credit Association)」、山梨ふうに言うなら「無尽」、「ネットワーク」、「ソーシャル・キャピタル」などがありました。その他、贈与や交換にかんする諸問題についての解説、水環境の問題、グローバル化と地域生活についての現代的状況についても解説を行いました。

地域交流にはさまざまな活動がふくまれます。また活動が行なわれる場面も多岐にわたります。活動をあらわすために用いられる言葉は、それぞれの場面で臨機応変に多義的に用いられることが少なくないものです。実践上は、そうした状況に対応していくことが求められることもあるでしょう。とはいえ、大学では地域交流の活動を学習・研究につなげていくことが求められます。そのためには、活動・実践の場で用いられる言葉が、学問的にはどういった背景のもとにあるかを知っておくことが有益でしょう。地域交流の現場で出会う言葉を、普遍的な文脈の上で理解することで、それぞれの個別の体験を、日本だけでなく世界で同じように活動に取り組む人々と共有することができるようになるからです。

地域交流研究Ⅰは、そうしたねらいのもと、今年度（2015年度）に開講された科目です。講義では、地域交流の現場でよく出会うと思われる言葉をピックアップし、それぞれの言葉の学問的背景を解

解説した言葉のうち、とくに「RCA（無尽）」については、少なからず反響がありました。受講者が山梨県や長野県の出身者で、もともとRCAの存在を知っていたり、アルバイト先の飲食店で「無尽会」（それが何を指すのか詳しくはわからなかったにせよ）というものがあることを知っていたところに、その学問的背景について解説が行なわれたことによるものでしょう。受講者が、RCAは日本だけではなくアジア、そして遠くアフリカでも見られるものだということを学んだことで、都留をはじめ山梨の文化と世界のつながりを感じられるものとなったように思います。

今年度は最初の開講であったため、手探りの部分も多くなりました。来年度は今年度得たフィードバックを活かして、より地域交流の実践上意義のある講義を展開できるようにしていきたいと思っています。

（やまぐち ひろし・本学COC推進機構教員）



大きなハブ空港



勝山城から

「地域交流研究Ⅱ」

—生きものの地図をつくる—

■西 教生

地域交流研究Ⅱの授業では、今年度も「生きものの地図をつくる」をテーマに授業をおこないました。身近に見られる生きものを対象に野外で調査をし、最終的にはその成果を1枚のパネルにまとめます。今年度は初めて、夜にカエル類の調査を実施しました。また、ツバメの巣の数と農地の面積の関係も調べることができました。

作製したパネルは、都留文科大学前駅の待合室に展示しています。今回は、この授業を受講した社会学科2年生の小俣溪和くんに感想を寄せていただきました。

(にし のりお・本学非常勤講師)



都留市では近年、個体数が激減しているトノサマガエル

—地域交流研究Ⅱの

授業を受けての感想—

■小俣溪和

授業を通してこの地域のツバメ、ハルゼミ、カエルなどの生きものを観察し地図に記録してきた。いままでは、いろいろな生きものを観察しながら歩くことはあったが、正確な数を数えることや地図上のどこにいたかを記しながら観察することは経験のないことだった。いつもはその場の観察で満足してしまふ。その観察が継続していくこともなかなかなかった。しかし生きものの地図作りをすることで、一定の期間のあいだ同じところにいる生きもののようすについて考えることができた。また、生きものを観察するだけでなく、観察をしていくうちにその地域の特徴もみなければならぬのがおもしろみだと思った。生きものを調査してその特徴を調べるには地域の特徴も考える必要がある。そのためにこの地図上の部分は、じつさいどんな土地利用がされているのかも調べながら地図上におとしていった。畑なのか田んぼなのか、道路は舗装されているのか砂利道なのか、家は何階建てなのかなど普段は考えもしないようなことに目を向けながら観察をしていた。その作業があることでその地域の特徴もみえてきたのだ。

授業のなかで生きものの地図を制作していくうちに、生きものについて調べたいと思ったときにその

生きものだけに注目しているだけではわからないこと、みえてこないことがあるのだとわかった。そこがどんな土地で、どうしてそこに住んでいるのかということも考えることが大切だと思った。生きものの地図を作ることで、生きもののことのほかにもこの地域のことについて知ることができた。

(おまた けいわ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年)



グループでの野外調査



「地域交流研究Ⅲ」

— 山梨を知り、歩き、
そのなかから自分の
課題を見つける —

■ 山口博史

地域交流研究Ⅲでは、県内各界で活躍する講師を招いての講義受講、フィールドワークへの参加、1回以上のイベント・ボランティア参加、県へのレポート提出を条件として「やまなし観光カレッジ」修了認定を行ない、修了資格者にそれまでの講義、フィールドワーク、イベント・ボランティア参加から得た発見をもとにレポート作成を求めることで単位認定を行います。講義で展開される県内各界の実情にかんする興味深い内容をもとに、受講者がリアクションペーパーを作成し、次回の授業時に世話役(担当・山口)がそこに講評を加えながらこの授業は進行していきました。

2 回行なわれたフィールドワークは、両日とも好天に恵まれ、成功のうちに終わりました。参加者からは、どちらの回でも「ひとつの場所にかける時間が短く、あわただしかった」旨の感想がありました。そのため、解散時や直後の回の授業で「それぞれの学びを深めるため、各自の関心に応じて再訪してほしい」ことを伝えました。その後、再訪の意向を示した受講者もあり、山梨にかんする主体的な学習の機会を提供できたものと思います。

(やまぐち ひろし・本学COC推進機構教員)

ゲスト講師を招いての講義

10月6日 開講式、山梨県の概要と観光振興

観光部職員(山梨県観光部)

10月13日 山梨の歴史 萩原三雄

(山梨県立考古博物館)

10月20日 山梨と富士山 中島紫穂

(山梨県富士山レンジャー)

10月27日 郡内織物の新しい挑戦 前田市郎

(株式会社前田源商店)

11月10日 地域活性 赤松智志

(富士吉田市 地域おこし協力隊)

11月17日 都留市の魅力 秋山英一郎

(都留市役所)

11月24日 甲州印傳 上原勇七

(株式会社印傳屋上原勇七)

12月1日 山梨のワイン 長谷部賢

(長谷部酒店)

12月8日 山梨の果実 堀内圓

(甲斐いちのみや金校園)

12月15日 『Can you speak 甲州弁?』

大堀卓 五緒川 津平太

フィールドワーク

11月21日 郡内方面 北口浅間神社、フジヤマ・

ミュージアム、山梨県立富士ビジター

センター、山梨県富士山科学研究所、

尾県郷土資料館

12月5日 国中方面 山梨県立博物館、笛吹川フ

ルーツ公園、シャトー勝沼、勝沼トン

ネルワインカーブ・大日影トンネル遊

歩道



勝沼トンネルワインカーブ見学の様子



尾県郷土資料館見学の様子

「地域交流研究Ⅳ」

— 地域を観察し、記録し、
学び合う —

■ 北垣憲仁

地域交流研究Ⅳの授業では、学生自らが地域に出て、自然や人の暮らしを観察し、記事にまとめ、冊子を編集しました。この授業は、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門の機関誌『フィールド・ノート』（30頁・31頁を参照してください）の実践をもとにしています。受講した学生に感想を記していただきました。

（きたがき けんじ・本学COC推進機構特任教授）

— 記事を書くことで
素敵な世界を知る —

■ 榎元明梨

今回わたしがこの授業を選んだのは、人に興味があつたからです。自分以外の考えの予想がなかなかつかないわたしは、いつも誰かと関わりとその新鮮な発想に驚き、心がまたひとつ豊かになったような気がするのです。

この授業を通して、ふだんは交流する機会のない方のお話を聞くことができました。好奇心と同じくらいに不安もありましたが、実際に取材をしてみると今まで自分が立ったことのない側からみた世界を知ることができ、素敵な経験になりました。

記事を書くうえでは、取材中に心で感じたことをどのように言葉に書き起こすか悩みました。声色のあたたかさや言葉にこめられた感情を文章に織り込むのはとても難しく、しかしその問題をどう解決するか考えることは非常に面白く、今振り返ってもその作業が一番印象に残っています。

この授業を受けて、相手の言葉が放たれるときの瞬間の表情や声色などに注意するようになりました。これからも自分の五感を最大限に活かしながら、コミュニケーションをとっていききたいです。

（ふくもと あかり・国文学科2年）

— 都留をもっと好きに
なりそう —

■ 窪田りさ

私がこの授業を選んだ理由は、小学生のころから文を書くのが好きだったからです。実際の授業では、取材したり、できた文章を誰かに読んでもらったり、文を書き上げる過程でも多くのことを学ぶことができました。

私は「ドレッシング工房 the pickle」のオーナーさんにお話を聞きましたが、「取材する」立場でなければなかなか自分からは動けません。インターネットで何でも調べられてしまう現在は、人の話をじっくり聴く機会をもつこと自体が少なくなっています。本当に貴重な経験となりました。

また、実際に記事を書くことは、取材した方や都留の魅力を改めて考えるきっかけになりました。どうしたらその魅力をうまくことばにできるのか、自分なりに時間をかけて吟味することはとても大変でしたが、やりがいのある作業でもありました。

私が取材したのは都留の人一人だけです。それでも、都留を形作る大切な一部分であることに変わりはありません。一部分を知ること、ほかの部分への興味も生まれました。これから都留をもっと好きになりそうです。

（くぼた りさ・社会学科1年）



授業で編集した記事

■地域交流研究教育プロジェクト■

「田んぼクラブ」 ―稲作体験学習の取り組み―

■西本勝美

十一年目を迎えた「田んぼクラブ」の活動、今年も学生中心で水田稲作に必要なすべての農作業をおこない、収穫にこぎ着けました。昨年の反省から播種^{はしゅ}の時期を早めたことで、苗の育ち具合は過去最高と言えるくらいでしたが、田植え後の生長がいまひとつでした。苗として立派に育っていればいい、というものでもなさそうです。まだまだわからないことがたくさんあります。また、昨年に引き続いて、天日干した稲の脱穀^{たかく}（脱穀は機械でやります）に難儀しました。都留市民の方でどなたか、脱穀機を気軽に貸していただける方を、ぜひご紹介ください。今年の学生代表は、社会学科3年の岡本周治くんです。岡本くんに、今年の活動を振り返ってもらいました。

（にしもと かつみ・本学初等教育学科教員）

田んぼクラブの活動を振り返って

■岡本周治

今年度も、田んぼクラブは、自分たちの手で米作りに取り組みました。

昨年に続き、今年も田んぼの一角に種籾^{たねもみ}を蒔いて苗を育てる「水苗代」や、田植えの際に苗を一本ずつ植える「一本植え」を行いました。

水の管理も大切な作業の一つです。田植えから9月の半ばにかけては、ほぼ毎日朝と夕方に部員みんなで分担して水見を行ないました。田植え直後は、一日でも水を入れるのを忘れてしまうと、すぐに田んぼの水が干上がってしまいます。一人一人の役割が非常に大事です。

今年から新たな取り組みとして、「田んぼノート」というものをつくり、はざ^{*}置き場の上に置きまし

た。水見に来た部員が気づいたことや作業の様子などを記入し、みんなで確認しあえるようにしました。活動の最も大きな山場は草取りです。田んぼクラブの活動は、無農薬をコンセプトに活動しているのですが、夏場には多くの草が生えます。これをまだそんなに大きくないうちは埋めたりしているのですが、大きくなってくると一本一本手で抜かなくてはならなくなります。参加人数が少なく、一人一人にかかる負担が非常に大きくなっています。部員の日程を調整し、なるべく多くの参加者が集まるときに作業を行なうことが大切です。

そして、夏休みの水見が終わってしばらく落水をした後、10月下旬に稲刈りをしました。

収穫するときの喜びは格別です。

私が田んぼクラブに入ろうと思ったきっかけは、自分たちの手で米を育ててみたいと思ったからでした。また、小学校の時に総合的な学習の時間でクラスで米作りをしたことや、祖父母のうちに田んぼを



天日干しのはざ掛けのようす。
充実の重さをかみしめながらの作業です。



田植えのようす。
やっと半分終わって一息。
「一本植え」なので、写真では植えた苗がよく見えません。

*はざ（稲架）…刈り取った穀物などを天日で干すために、地面につかない程度の高さで掛けられるよう、木や竹の横木や柱を組み合わせて作ったもの。はざ、稲木（いなぎ）、稲掛け（いねかけ）、稲機（いなばた）などともいう。

借りて米を作っていたことなど、田んぼにはもともと馴染みがありました。

この活動を通して、普段自分たちが食べているお米がどのような経緯でつくられているのかを知ることができました。また、多くの人々の手にかえられることによって自分たちのもとに届くということを実感しました。

米作りの活動を通して多くの人々とながりが持て、そのなかで自分自身が大きく成長することができて良かったと思っています。

（おかもと しゅうじ・社会学科現代社会専攻3年）

都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした 水環境の経年変化の把握

湧水の様子を連続的に観る

■内山美恵子

都留市十日市場・夏狩地区は、平成名水百選に選定された湧水群がある場所として有名です。ここで湧水するメカニズムについては、定性的には明らかにされていますが、定量的な変化や詳細な地下水流動についてはほとんどデータがありません。この状態では大切な湧水の保全を行なうにしても、具体的にどの場所をどのように保全するのが有効であるのか、対策を立てることができません。そこで十日市場・夏狩湧水群の湧水が1年を通じて変化しているかどうかを連続観測し、数値データとして把握する目的で、平成27年度より3年間のプロジェクト研究を始めました。本年度は初年度ということで、湧水の量的な変化の把握を目標としました。

まずはフィールドの予備調査を行なうて、湧水地点の確認と、観測を行なうのに適した場所を探しました。その結果、常に湧水があつて涸れないこと、大雨などが降っても流されないこと、湧水量が多すぎないこと、観測地点にアクセスしやすいこと、などを考慮して、十日市場にある永寿院さんにご協力

をいただき、お堂の裏で連続水位観測装置を10月に設置させていただきました(写真1)。ここでは、流路に固定した有孔塩ビ管のなかに水圧式自記水位計を設置し、10分間隔で水位観測を実施しています。この水位データを流量に換算するための水位流量曲線を作成するために、およそ2回/月のペースで地学ゼミの学生に手伝ってもらつて、流量観測を実施しました。また、あわせて水質の現地簡易観測(写

真2)と、水質分析用の試料を採取しています。この原稿を書いている現在はまだ連続観測を始めて2か月ほどですが、湧水量に周期的な細かな変動がありそうな気配が見えてきました。それは見かけ上のものなのか、実際のものなのか。実際に変動があるのなら、その理由は自然的なものなのか、人為的なものなのか。これから気象データをはじめ、周辺の情報も集めながら解析していきます。

(うちやま みえこ・本学COC推進機構特任教授)



写真1 連続水位観測装置の設置状況



写真2 現地で水質を簡易観測している様子

食育つる推進プラン

～市民会議と大学の連携による学生主体の食育実践活動の試み～

学生と共に推進する食育教室

初等教育学科生活環境科学系（家庭科）は、都留市内の園児や児童の皆さんと食育教室を通じて交流を深めています。この食育実践は、都留市が平成25年度から策定している「新食育つる推進プラン」に基づき、都留市内における肥満児童数の増加を抑えるための一案として、ゼミ生たちが食育教室の開催を考えたことがきっかけとなっています。

今年度は、昨年度に引き続きさくら保育園と、初めて禾生第二小学校の学童クラブであるわんぱく教室に於いて活動を行いました。つぎに参加した学生2名に感想を記してもらいました。

■柳 映志

さくら保育園における食育教室では、朝ごはんの大切さを伝えた紙芝居や、残さず食べることの大切さを歌や踊りを交えて表現したパネルシアター、また野菜スタンプを用いたスタンプラリーなどを行いました。私たちゼミ生は、普段の生活では乳幼児に接する機会が皆無いため、園児の皆さんとどのようにコミュニケーションを取れば良いのか分からず、当初は非常に緊張しました。しかし、始まってみると、園児の皆さんの反応が予想以上に大きく、お互い笑顔が溢れた食育活動を行なうことが出来ました。今回の教室では、食育の効果的な伝え方を考える事が大変でしたが、楽しみながら学ぶことの重要性を改めて実感しました。これをきっかけに、保育施設や各教育機関と大学が連携しながら、さまざまな場所で食育を推進していける機会になればいいと思います。

（やなぎ えいじ・初等教育学科4年）

■平 和香子

（たいら わかこ・本学初等教育学科教員）

今年度初めて、禾生第二小学校の学童クラブであるわんぱく教室の皆さんに「食べ物のほたらきを知ろう」と「おやつ適切な量を知ろう」「カロリーと運動との関係を知ろう」というテーマで、全3回の食育教室を行いました。

第1回目の食育教室では、3つの食品群のはたらきと分類を説明し、食育釣りゲームをしながら、児童自身が3つの食品群と主食・主菜・副菜を理解できるようにしました。第2回目の食育教室では、市販のおやつ選びを、カロリーを基準に自己選択することができるようになりました。第3回目ではカロリーと運動の関係性について、実際に身体を動かしながら学びました。児童の皆さんにとっては、普段のお菓子の食べ過ぎに気づいてもらえる機会ともなったようです。今回の活動を通じ、学童など学校教育現場以外においても、積極的に栄養教育を行なえるチャンスがあることが分かりました。今後の都留市内の食育教育の発展につなげていけたらと思います。

（みその ゆかり・初等教育学科4年）



さくら保育園の皆さんと一緒に



誰のお弁当かな？

最後に、ここに改めまして御世話になりました全ての皆様に、心より厚く御礼申し上げます。尚、本食育教室は「食育つる推進市民会議」における取り組みの一環として活動させていただきました。また、今年度の活動は都留文科大特別教育研究費の助成を受けました。ここに併せて深く感謝致します。

学級づくりの向上をめざす実践講座を振り返って

鶴田清司

学級づくりの重要性が叫ばれるわりには、その具体的な方法については学ぶ機会が少ないという現状をふまえて、平成24年度から本講座がスタートしました。学級づくりの達人たちが、ご自分の実践を具体的に語って下さるのが最大の魅力です。また、学生にとっては、さまざまな問題をめぐって現職の先生方と率直に語り合うことができます。平成27年度は7回にわたって開催されました。参加者は134名でした。

・第1回 4月25日(土) 渡辺幸之助(秋山中学校)

SNSに負けるな！コミュニケーションに満ちた学級づくり

・第2回 5月23日(土) 金勝武鑑(富士学苑中学校)

子どもたち、この素晴らしきもの

・第3回 6月27日(土) 長谷川俊一(池田小学校)

班やリーダーの意味は何？原則から今抱える悩みまで

・第4回 7月25日(土) 渡邊克吉(吉田小学校)

対話と話し合い活動を通して安心感のある学級づくりを

・第5回 9月26日(土) 芦澤稔也(増穂中学校)

自主学習ノートの挑戦！学力保障から信頼関係づくりまで

・第6回 10月24日(土) 清水佳子(禾生第二小

学校)

子どもを信じ、認めることから学級づくりが変わる

・第7回 11月28日(土) 三浦 淳(都留第二中学校)

Q・U学級満足度90%以上を目指す学級づくり
「学級担任の夢と理想」

参加者の感想をいくつか紹介します。

・今は学生という立場ですが、いつかは先生になりたい身として今日は貴重なお話を伺うことができて気持ちが引きしまった気がします。クラスの中の児童や生徒同士の関係づくりは日々の授業を含め、生活で築かれていくことがわかりました。人間関係づくりが全てのことに生きてくると思うので、認め合えるクラスはとても理想的だと思いました。(大学4年)

・子ども、保護者とまっすぐに向き合っていられつやる清水先生のお話全てに学ぶことがありました。さまざまな子どもたちのエピソードを聞き、今担当している子どもたちの可能性も広がりました。子ども・保護者へのかかわり方、勇気づけ方、教師としてのあり方など、今後、今日の講座のことを自分の学級経営に生かしていきたいと思います。(小学校教諭)

・一人で抱えないこと、チームであることの大切さを感じました。中学生自身も答えがなかったかもしれない、原因の解明も難しかったと思います。明確な方向性が見えず、手探りのなかでも、目の前の子どもを何とか理解しようとするこの大切さを感じました。私の

クラスでも心配な生徒がいます。私はその子を認め、「見守っているよ」という気持ちを伝えられているのか心が苦しくなりました。早くその子に話しかけたいと思いました。(中学校教諭)

・清水先生がイキイキと話をする姿を拝見して、教職の「よさ」を改めて感じました。生徒の心に一歩踏み込んで学級づくりに励みたいと思います。本当に有意義な時間をありがとうございました。(高校教諭)

今年度の成果と課題としては次のことがあげられます。

①1学期の参加者が多く、4月の告知が現場に伝わっていると感じた。逆に2学期になると参加者が少なくなり、年に2回告知することが可能かどうか検討したい。

②年々、都留文大の学生の参加姿勢が向上していて、今年は特に質問・意見などに可能性を感じると本講座の企画者である渡辺幸之助先生からお誉めの言葉をいただいた。また、私のゼミ生のなかには講座をきっかけにして、実際の授業を参観させていただいた学生もいた。講座のなかに必ず意見交換のできる場を設けているが、今後も続けていきたい。

③年に1回、数人の講師で参加者も交えてのシンポジウムのな学習会を企画してみたい。具体的には7月を考えているが、講師選定でより多くの方からの協力が必要となる。

(つるだ せいじ・本学初等教育学科教員)

文大名画座『ツナグ』と辻村深月先生とのトーク

古川裕佳

平成27年度第一回目の「文大名画座」を、都留文科大創立60周年事業の一つとして、山梨県出身の直木賞作家・辻村深月さんをお招きして6月27日(土)に開催いたしました。今回は『映画「ツナグ」上映会』と「辻村深月トークイベント」の二部構成で、第一部では辻村さん原作の映画『ツナグ』の上映会を、第二部では本学国文学科の古川裕佳教授をコーディネーターとして、辻村さんご本人によるトークイベントを行っていただきました。

トークイベントでは、辻村さんに小説家としての生き方や女性のキャリアなどについてお話しただき、また質疑応答では、学生からの質問に対して、ご自身のエピソードを織り交ぜながら親身に回答してくださいました。

当日は本学の学生のみならず、一般の市民のかたなど200名近くにご参加いただき、大変な盛況となりました。

去る6月に山梨県出身で直木賞作家の辻村深月先生をお迎えして、辻村先生原作の映画『ツナグ』の上映と、トークイベントを行なった。参加者は事前申し込みですでに教室定員一杯となる200名。笑わせて泣かせる映画の魅力と、現役バリバリで活躍する人気作家を目のにした学生の熱気とで大変盛り上がりイベントとなった。私自身も日本文学の研究者という点からはもちろん、ミステリファンとして、このイベントを楽しみにしており、想像以上に気さくでフレンドリーな「大作家」にお会いできた嬉しい一日となった。

辻村深月先生は、山梨県笛吹市の生まれで、山梨学院附属高校から千葉大学教育学部へ進学、在学中はミステリ研究会に所属し、卒業後、故郷で働きながら作品を書き続け、高校生の頃からあたためていた「冷たい校舎の時は止まる」を投稿して、二〇〇四年メフィスト賞を受賞、華々しい

デビューを飾る。その後順調にキャリアを重ね、二〇一一年、「ツナグ」で吉川英治新人賞を受賞、翌二〇一二年「鍵のない夢を見る」で147回直木賞を受賞し、エンターテインメント性と本格的なミステリとの両方を備えた作家としての地位を確立した。

作風は本格推理とSF的要素を融合したミステリから、SFとも異なるリアリティを持ちながら非現実的な経験をするファンタジーまで幅広い。繊細な心理を徹底的に描き出しつつ、同時に叙述トリックを駆使する隙の無いエンターテインメントである。二〇一一年以来ワーキングマザーとなり、続々と魅力的な作品を生み出している。

『ツナグ』は、誰か大切な人を亡くしたとき、「ツナグ」という存在に依頼することで、死者を一日だけ呼び出すことができる、という不思議な設定を用いた短篇連作なのだが、それぞれの登場人物

のリアリティーによって、本当にそのようなことがあるかもしれないと思わせる力強い物語となっている。映画においても、作り手の細部までの工夫と演じる役者の徹底したリアリズムの演技力で、ファンタジーであることを忘れさせる作品となっていた。見るもの皆が、登場人物たちの死者への想いに涙しつつ、私もそんな風に誰かを呼び出すとしたら…と考えさせられたことだろう。

イベントではこのような映画への感動さめやらぬうちに、そのまま作者の辻村深月先生登場！、学生と直接の対話の始まりとなった。

イベントに先立って、先生に聞いてみたいことをアンケートで集めていたのだが、やはり本物の作家にお会いすると学生に興味は何よりもまず辻村ワールドの「作り方」に集まる。辻村ワールドとは、東京ではない地方都市の一見ごく普通の中・高生の日常的な世界を描きながら、それがふと違う、少し怖くて不思議な世界に迷い込んでいく、というような物語であり、その登場人物たちは普通なようであるが何か特別な存在(死者と交流できたり、時空間を超えたり、魔法(?)のことは使えたり…)として造形される。学生たちの質問はこうした世界観が先か、キャラクターが先か、また、登場人物の設定はどうやって考えるのか、などなど、辻村ワールドのレシピに集まった。

印象深かったのは、新たな登場人物を描くとしたらどうするか、について具体的にお話くださったことである。例えば大学生を描くとして今、ここにいる200人の中から誰かをモデルにして書くようにするのはなく、201人目はどんな人に

なるかを考える、というのが辻村深月先生のやり方なのだというお話。研究者などはすぐにこの登場人物のモデルは：と探したくなるのだが、創作者は全く違う方向で物を考えていると知って、創造という行為の秘密に触れた思いがした。

また、参加した大学生のために、卒業論文の思ひ出をお話くださったのも面白かった。じつは辻村先生は文学系ではなく、ファッションを哲学するという内容で書いたということ、それはすでに当時から小説を書いていた本人にとつては、全く普段とは異なる作業、異なる文章を書くという体験であり、であるがゆえにそこできやらない体験として意義深かったという話は、これから卒業を書く学生たちの心に響いたことだろう。

辻村深月先生は本当に気さくに大学生の気持ちになつてお話くださっており、そのフレンドリーな雰囲気のおかげで「先輩」に会ったような気分になったのかもしれない。「エントリーシート」の書き方についての質問まで飛び出した。これについても、辻村先生自身が就活の経験があり、職場経験もある（今回の企画で活躍くださった本学某T氏の元同僚として！）ということをおまえて、エントリーシートの向こう側にいる読み手のことを想像しながら書く、という大切な技を伝授してくださったのもありがたいことだった。想像力は小説を書くときだけ役立つわけではないということなのだ。

予定された質問の他にも次々と学生たちからの質問が飛びだし、あつという間に楽しいトークの時間も終わってしまった。興奮の読書体験、感動の映画鑑賞、そして楽しいトークを学生に与えて

くださった辻村深月先生に心からお礼を申し上げます。そして地域交流研究センターの皆様ありがとうございました。

（ふるかわ ゆか・本学国文学科教員）



右は辻村深月さん
左はコーディネーターの古川裕佳教授



学生からの質問を受ける辻村さん

平成27年度子ども公開講座

■ 内山美恵子

地域交流研究センターでは都留市内の小中学生を対象に、子ども公開講座（都留市子ども教室内の事業の一つ）を都留市教育委員会との共催で行なっています。平成27年度は6講座（Hello! 英語でワクワク!、「楽しく走ろう Run, Run, Run!」、「留学生とあそぼう!」、「富士山の中の水の旅」、「ムササビに会いに行こう!」、「読書の楽しさを知る」）が開かれました。このなかから、今年度初めて開講された講座について報告します。

（うちやま みえこ・本学COC推進機構特任教授）

都留市内で湧いている水がどのようにしてここまで旅してくるのかを学ぼう、ということと、平成27年8月23日に「富士山の中の水の旅」と銘打って、富士吉田市にある山梨県富士山科学研究所（以下、M F R I と書きま

す）を会場に子ども公開講座を行ないました。当日は残念ながら雨模様でしたが、17名の親子が参加してくれました。

M F R I は富士山麓の標高10000mにある研究所で、西暦937年に流れた剣丸尾第1溶岩の上に建っており、溶岩のさまざまな構造が見られます。講座では、まず室内でテキストを使って一般的な火山の勉強をし、その後、生態観察園でセルフシートに記入しながら溶岩観察をしました。観察では、初等教育学科地学ゼミの笹木優衣さんと杉山さんが班長を担当しました。はじめは緊張した面持ちだった子どもたちもすぐに班長さんに慣れ、にぎやかに本物の溶岩を見て回りまし

学生の感想

笹木優衣

今回子ども公開講座の補助を行なうことについてたくさんの方の不安があったが、当日は保護者の方の対応や子どもたちの反応が良く、私自身子どもたちと交流を持ちながら楽しく補助を行なうことができた。学習において、実験や観察を通して自分の目で見て知り、実際に体験することの大切さを学んだ。事前学習などを通して学んだことも多くあったが、

実験での時間の使い方や説明において勉強不足なところもあり反省すべき点も見られたので、今後の大学生活に活かしていきたい。

（ささき ゆい・初等教育学科4年）

杉山 圭

参加者の方たちに楽しみながら学習してもらえるか心配だったが、プログラムが進んでいくにつれ、一緒に話したり体験したりしながら打ち解けることができ、参加者とスタッフが互いに楽しむことができたと感じた。体を動かしたり、目の前で実験を見たりという活動に子どもたちが目を輝かせていたのがとても印象に残った。担当した実験の流れや説明のしかたなど反省はたくさんあるが、参加者の皆さんに楽しんでもらえたのがうれしかった。とても良い経験になった。

（すぎやま けい・初等教育学科4年）



溶岩の吸水実験。
笹木さんの手元を見つめる子どもたち

地域交流研究センターサテライトから

—都留文科大と地域をつなぐために—

■佐藤理恵

私が都留文科大地域交流研究センターのサテライト（都留市まちづくり交流センター内）に配属されて約2年、サテライトが設立されて約3年が経とうとしています。サテライトは地域のかたがたに大学をより身近に感じてほしい、さらに深く知っていただくことや大学と市民との交流促進を図ることを目的として設置されました。

今年度は、新しい試みとして、地域交流研究センター（以下、センター）の活動をより幅広い人たちに知ってもらうと、センターのブログを大学ホームページ内に開設しました。センター主催のイベント情報のお知らせや学生が関わった地域での出来事の報告などを随時掲載していきますので、ぜひみなさんご覧ください。また、本センターの部門活動の一つである、発達援助部門において地域美術教育に取り組んでいる本センター長の鳥原先生とサテライトとの共催で、市立図書館にて絵の展示会「てん・てん」を開催したことも印象深い出来事でした（本誌14頁を参照してください）。センターの活動を知っていただく機会をこれからいろいろなかたちで設けていきたいと思っています。

また、サテライトは、学生へのボランティア募集やイベント協力への相談窓口機能も担っており、地域のかがたがたからさまざまなニーズが寄せられます。たとえば、都留市の住民自治組織である「谷村地域協働のまちづくり推進会」からは、学生と楽しく交流できるような会を企画して欲しいとの要望があり、落語研究会とかるたサークルに協力をしてもらい、寄席とかるた遊びの交流会を開催しました。当日は、20名ほどの地域のかたがたにお越しいただき、「このような会をまた開催して欲しい」との声をいただきました（本誌44頁を参照してください）。落語研究会やかるたサークルにかぎったことではないのですが、さまざまな学生と接するなかで感じることは、自分たちの活動に対してじつに真摯に向き合い、そして、相手を楽しませることに積極的であるということです。正直なところ、地域のかたがたと学生は互いに交流せずとも、日常生活を送るうえではあまり支障はないのかもしれませんが、交流から得られる心の充実感や日常生活を彩るかけがえのない経験になるのではないかと思います。

サテライトの歴史はまだまだ浅く、発展途上であると思います。大学と地域の交流の輪を広げるサポート役として、今後さらにサテライトが活用されることを期待します。

（さとう りえ・本学職員）



市立図書館にて開催した
絵の展示会「てん・てん」



センターのブログでは、大学と地域にかんする出来事を掲載しています。

センターのブログはこちら

【<http://www.tsuru.ac.jp/subject/chiikikouryu/>】

地域交流研究センターサテライトから

谷村地域協働のまちづくり推進会より大学生との交流会を企画したいとの要望を受け、都留市まちづくり交流センターにて落語研究会とかるたサークル合同の地域交流会を開催しました。落語研究会の代表学生にそのときの感想などを寄せてもらいました。

——地域に広がれ！笑顔の輪！——

■小島花野

都留文科大学落語研究会（落研^{おちけん}）は、2014年6月に発足しました。落語の面白さを伝えたい、共有したいという思いが、結成のきっかけでした。片手で数えられるほどだった部員も20人近くまで増え、週2回の定例会には笑い声が絶えません。そんな落研がここまで成長できた背景には、都留の地域のかたがたの支えがあります。

「周囲に笑顔の輪を広げていく源になること。」これは落研の結成目的の一つです。落語は元々、江戸時代の庶民の娯楽。さまざまな人が寄席^{よせ}という一つの空間に集まり、くだらない噺^{はな}にしばしの安らぎを得ます。そうしたことから、落研も活動を通して、人と人が時間を共有し、交流できる場をつくりだすことが大切だと私たちは考えました。そこで、地域交流研究センターや社会福祉協議会との連携を図り、地域に開かれた活動を始めることにしました。

その一つに、2015年9月に都留市まちづくり交流センターで行なわれた交流会「夢実現ひろば」での寄席があります。初めて出会う地域のかたの前での落語披露は緊張もありましたが、それ以上に大きな喜びを感じました。私たちの落語を

通して、すぐ目の前で笑顔や会話が生まれるのです。くすりと笑うかた、声をあげて笑うかた、吹き出すかた、にこにこ眺めるかた……いろいろな笑顔が会場に広がりました。このときの感動は、今も忘れることができません。人と関わり、話し、笑い合う。落語は、そのきっかけになることができると実感しました。そして、これからもっと多くのかたを落語で笑顔にしたい、もっとたくさん交流したいという思いが強くなりました。

こうした地域での寄席が終わると、「面白かったよ」「これからも頑張つて」と温かい言葉をかけてくださるかたがたくさんいらっしゃいます。そんなとき私は「こちらこそ、楽しかったです。ありがとうございます」と心からお伝えしています。地域で寄席を開き、笑っていたいだいたり、ときにアドバイスをいただいたりすることは、私たちにとっても楽しく、刺激的なことだからです。腕は未熟ではありますが、大学生らしいはつらつとした落語で、これからも地域の皆さんに元氣や笑顔の輪を少しでも広げられたらと思います。

（こじま かの・国文学科3年）



落語を披露する小島さん



大人から子どもまで幅広い年齢層のかたが見に来てくれました

地域交流研究センターサテライトから

都留市まちづくり交流センターでは、「暮らしに役立つみんなの広場」と題したミニ講座を定期的に開催しており、毎回、ボランティア講師による多彩な特技や趣味を活かした講座を開講しています。学生と地域のかたがたとの交流の機会づくりとして、「暮らしに役立つみんなの広場」では、学生にも講師として協力してもらっています。今回、講師を務めた学生に感想を寄せていただきました。

— 洋裁ワークショップを開いて —

■ 武田美月

はじめまして。都留文科大学3年の武田美月です。私は、都留市まちづくり交流センター主催「暮らしに役立つみんなの広場」で洋裁のワークショップを2度開かせてもらいました。きっかけは同じ専攻で仲の良い友人に誘われたことでした。私は元々手芸が好きで、高校生の頃「服飾部」という部活動に所属して洋服づくりをしていました。その経験を知っていた友人がまちづくり交流センターでこんなイベントがあるよ、と教えてくれたのです。声をかけられたときは不安でしたが良い勉強になるのではない、引き受けることにしました。1度目の講師は私1人で、2度目は教室を紹介してくれた友人と2人で行ないました。

はじめの教室では鍋敷き・鍋つかみ作り教室を開きました。「開きました」と言っても、教室開催までにはまちづくり交流センターの担当者のかたに多大なお力添えをいただきました。生地調達、型紙づくり、試作品づくりなど助けていただいたことがたくさんありました。そんななか迎えた当日は、8名の参加者のかたと世間話をしながら和やかな雰囲気に進んでいきました。作っている最中、参加者の皆さんの楽しそうな姿が見られ、ホッとしました。ただ、反省点も多くなつた良い教室にしようと心に決めました。

2度目はルームシューズを作ることにしました。ルームシューズは作るのに多大な時間がかかってしまうため簡単なキットにして参加者に配ることにしました。そのキット作りにはとても苦労しました。でも一緒に講師をした友人と「いい教室にしたいね」と話しながらの準備は、とてもいい思い出になりました。当日会場に着くと前回も参加して下さったかたの姿が。「前回の鍋つかみ、家でも作ったよ」と声を掛けてくださり本当に嬉しかったです。2度目は講師2人で参加者皆さんの様子をみながらうまく進められたかなと思います。

講師を終えて振り返ると、この経験はとても有意義であったと思います。大学に通っているだけでは出会えなかったかたと充実した時間が過ごせました。わざわざ遠くから著名な講師を呼ばずとも地域のなかには色んな分野の名人がいます。私は名人とは程遠い講師でしたが、参加者との交流のなかから学んだことがたくさんありました。このような機会をいただき、本当にありがとうございます。みなさんも自分の得意なこと教室を開いてみてはいかがでしょうか。

(ただ みづき・社会学科)

環境・コミュニティ創造専攻3年



参加者とお話をしながら楽しく作りました。



ルームシューズの作り方を教える武田さん（中央）と友人の伊藤さん（右）

第11回地域交流研究フォーラムの開催

地域交流研究活動 — SAT活動をふり返って —

平成27年12月12日(土)に本学2号館1F2102教室で「第11回地域交流研究フォーラム

地域交流研究活動 — SAT活動をふり返って —」を開催しました。

地域交流研究センターの部門活動の一つである発達援助部門において発展をとげてきたSAT活動が、平成28年度から教職支援センターに移管することになりました。

本フォーラムは、これまでのSAT活動を振り返りつつ改めてその概念と意義について確認するとともに、地域交流研究センターと移管先である教職支援センター関係者が共に、これまでの成果を共有し今後の可能性について探るものでした。

■鳥原正敏

SATについて

SAT(学生アシスタント・ティーチャー)とは、学生を学校に派遣し、「学習支援」と、「学力不振」「不登校傾向」「障がい」などによる困難をもつ子どもへの個別的な支援を体験させることによって、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力を持つ教員養成の深化・発展をはかるものであり、こういった活動の総称です。

これは本学独自の発想による活動で、平成17年度より地域交流研究センターの事業の一つとして始まり、その後、Aタイプ(放課後活動)、Bタイプ(授業中活動)、Cタイプ(困難を持つ子どもへの支援)をベースに、現在では教科または教職に関する科目「学校参加Ⅰ・Ⅱ」教職に関する科目「教職実践演習(学校参加型)」教職実践演習(臨床教育型)」教職実践演習(教育研究型)」へと発展してきました。

その後、本学教職支援センターの設置(平成26年度)に伴い、平成28年度から全てのSAT活動の運営は、地域交流研究センターから教職支援センターに移管される予定です。

プログラムと様子

こういった経緯を踏まえ、本フォーラム第一部では「SATのはじまりと変遷」をテーマとして、SATの概要と意義、これまでの変遷について佐藤隆先生(初等教育学科教授)からお話を伺いました。その後「SAT」「学校参加」「教職実践演習」といったキーワードについて、杉本光司先生(元地域交流研究センター長)に整理して頂きました。(図1参照)更に、SATの立ち上げにご尽力いただいた勝俣武男先生(元キャリアサポートセンター・教員アドバイザー)から、黎明期の様子について当時のエピソードなどをもとにお話を伺いました。ここではこれま



会場の風景

での活動を整理しながら、さまざまな困難を乗り越えて今日に至る様子を拝聴しました。

第二部では「S A Tの現状報告と今後の可能性」をテーマとして、亀田孝夫先生（本学教職支援センター特任講師）から「教職実践演習におけるS A Tの現状」について、昨年度行なわれたS A Tに関する調査に基づいてご報告いただきました。また、亀田先生からの報告を受けて、フォーラムにご参加頂いた多くの小・中学校の先生のなかから、野木忠一先生（東桂小学校校長）、羽田静香先生（都留第二中学校教頭）、齊藤隆広先生（都留第一中学校教務主任）、古屋ひとみ先生（谷村第一小学校教頭）、鈴木守先生（谷村第一小学校教務主任）より現場の様子や今後に期待することなどについてご発言いただきました。

これに続き、本学の宮下聡先生（本学教職支援センター特任教授）からも「大学と学生、受け入れ校がお互いに利する関係の構築を目指したい」といった趣旨のご発言をいただきました。また山崎隆夫先生（本学教職支援センター特任教授）からは教職支援センターを代表し、「都留では地域の人々に支えられながら本物の教師になる学生が育っている、またこれに感謝したい」といった趣旨のご発言がありました。最後に、佐藤隆先生より「世界的な教職の流れとともに都留のS A T活動はあり、つくられてきた。これからもこういった活動であるよう期待したい」といった趣旨のご発言がありました。

フォーラムを終えて

本フォーラムにはおよそ30人の方にご参加いただ

きました。

フォーラム開催前後の時間では、これまでS A Tに関わってこられた方々が再会を喜び合い、歓談する様子が見られました。また卒業生が教師となって参加し、恩師と再会する場面もみられました。改めて、S A Tを通して大学と教育現場が繋がっているといった実感を持ちました。

プログラムのなかでは、佐藤先生や勝俣先生のお話から、さまざまな課題を乗り越えてS A T活動を始めた様子がよく理解できました。また、亀田先生やご発言頂いた小・中学校の先生方のお話から、「本物の教師を育てる」といった意義を大学と分かち合いながら、お忙しい日々の活動のなかでご尽力いただいている様子に、本学が地域とともにあることを強く感じました。

また、勝俣先生などS A Tの立ち上げにご尽力いただいた方々から直接、当時の様子やS A Tへの想いを伺えたことは大変意義深いものであったと感じています。そして、ここで行なわれた発表や報告、ご発言を通して我々主催者も含め、S A Tについて本フォーラム参加者の理解がより深まり、その意義を共有できたと感じています。

最後に、暮れのお忙しい時期にもかかわらず参加頂きました皆様、主催者を代表して厚く御礼申し上げます。また、森博俊先生（本学名誉教授）をはじめS A Tの立ち上げにご尽力された方々に心より敬意を表したいと思います。

（とりはら まさとし・本学地域交流研究センター長

（図1）S A Tプログラム、科目『学校参加』・『教職実践演習』の状況（平成27年度）

平成27年12月12日（土）

分類	『学校参加』		『教職実践演習』		
プログラム	S A T (Students Assistant Teacher) プログラム				講義プログラム
科目名	『学校参加Ⅰ』	『学校参加Ⅱ』	教職実践演習（学校参加型）	教職実践演習（臨床教育型）	教職実践演習（教育研究型）
対象年度	3年	2年	4年	4年	4年
クラス数	A～K（11クラス）	A～K（11クラス）	初等（8クラス）、中等（3クラス）	初等（2クラス）	初等（2クラス）、中等（3クラス）
クラス	A：谷一小	A：谷一小	初等 A：谷一小	A	初等 A
	B：谷二小	B：谷二小	初等 B：谷二小	B	初等 B
	C：附属小	C：附属小	初等 C：附属小		中等 A
	D：東桂小	D：東桂小	初等 D：東桂小		中等 B
	E：禾生第一小	E：禾生第一小	初等 E：禾生第一小		中等 C
	F：禾生第二小	F：禾生第二小	初等 F：禾生第二小		
	G：宝小	G：宝小	初等 G：宝小		
	H：旭小	H：旭小	初等 H：旭小		
	I：都留一中	I：都留一中	中等 A：都留一中		
	J：都留二中	J：都留二中	中等 B：都留二中		
	K：東桂中	K：東桂中	中等 C：東桂中		
	それぞれのクラス（学校）にAタイプ（放課後活動）とBタイプ（授業中活動）がある			Cタイプ	学内においての授業

担当教員

A：田中・亀田 B：清水 C：中井 D：市原 E：平野
F：柳 G：麻場 H：鳥原 I：高田（研） J：金山 K：鈴木

A：堤 B：筒井 初等 A：鶴田 B：西本
中等 A：新見 B：松土 C：金山

●●編集後記●●

平成 27 年度の「地域交流センター通信」27 号をお届けします。本号発行にあたり、巻頭文を吉川徹（よしかわ とおる）先生にお願いしました。吉川先生は東京都のご出身で、東京教育大学卒業、東京大学宮原研究室研究生を経て、望月町役場に社会教育主事として赴任されました。また元望月町町長であり、現在は長野県佐久市多津衛民芸館館長をされています。

吉川先生は、学習と実践の積み重ねがいかに大切かを具体的に巻頭文で述べておられます。そのゆたかな諸実践と思想には、本学地域交流研究センターが新たな一步を踏み出すうえでつねに考えていかなばならない重要な視点が含まれています。ぜひ、本通信の 4、5 頁「地域づくりの基礎に学習を」をご覧ください。

本センターは、これまでの場所（コミュニケーションホール地下一階）が手狭になり、より広く、利便性の高い場所への移転が望まれてきました。

こういった状況を踏まえ、今年 4 月に 4 号館一階に移転することになりました。現在は、来年

度のグランドオープンに向けて準備を進めています。ここには地域交流研究センターとともに、COC 推進機構も移転します。これにより、地域にかかわる学内の組織が一か所に集約されて、より地域に根ざした活動ができるようになると思います。

これまで同様、わたしたちは新しい冊子やブログを通じて本センターの活動をより多くの方に深く知っていただけるよう努めていきます。今後とも、何卒、ご指導、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後に、本センターの元担当事務局員であり、市職員としてご活躍であった本田祐士さんが、8 月にお亡くなりになりました（享年 27）。本田さんはわたしたちの大切な仲間であり、センターサテライトの立ち上げにご尽力いただきました。センターを代表してご冥福をお祈り申し上げます。

（地域交流研究センター長 鳥原正敏）



絵・成瀬洋平（本学卒業生）

地域交流センター通信 第27号：2016年3月14日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（編集長・北垣憲仁 鳥原正敏 杉本光司 別宮有紀子 堤英俊 福島万紀 品田栄子

（C）発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 tel.0554-43-4341（代）

田中正樹 奈良健三 横田祐太郎 小林幸恵 佐藤理恵）